２００５年の世界の不登校研究の概観

― PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から ―

佐藤正道

要約

日本の不登校の問題を考える上で，常に世界の研究に目を向け続けることは必要である。筆者は 1980 年から 1990 年までの研究の概観を行い，その継続研究として 1991 年から 1 年毎に ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の不登校との関連が考えられるキーワード school
attendance，school dropouts，school phobia ，school refusal を持つ文献を分類してきている。その継続研究として 2005 年の文献 139 件について取り上げ分類し検討を加えた。

Key words : school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal

Ⅰ　はじめに

筆者（1992a）は，諸外国と日本における不登校の初期研究を踏まえた上で，ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal をキーワードとする 1980 年から 1990 年の 400 件あまりの文献を中心に各国別，年代順別に分類し，不登校研究の概観を行った。不登校の問題を考える上で，日本国内ばかりではなく世界の研究に常に目を向け続け, 1 年毎の形式で蓄積していくことは意味があると考え, 1991 年からそれぞれの年の文献について継続研究を行ってきた（1992b,1993,1994,1995,1996,1997,1998,1999,2000,2001,2002,2003,2004,2005）。

本研究は，2005 年の文献についての継続研究である。今回の研究では，これまでの研究と同様, ERIC データベースと DIALOG データベースの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS（PsycINFO データベース）を用い，文献検索を行おうとした。しかし，ERIC データベースは 2003 年の文献以降，データベースの検索形態を変更したため，2003 年以降の文献については，年毎の検索ができなくなった。2005 年の文献についても検索方法が変更のままで，同様の形態の検索ができない状態である。2005 年の文献については，PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS のみとなる。検索方法は，インターネット経由での作業を行った。これらの中から不登校との関連が考えられるものについて，キーワード毎に分類した。筆者の作業（1992a）に続くこの継続研究は，今回で 15 年目に当たるが, 同一規準で 15 年分の作業をし, 世界での傾向を把握する基礎研究の 2005 年分である。なお，PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS での検索形態が変更になった段階でこの基礎研究は終了することとする。

DIALOG データベースでの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS では，school attendance に関する文献が 372 件，school dropouts に関する文献が 190 件，school phobia に関する文献が 252 件，school refusal に関する文献は 121 件であった。

PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS データベース 935 件の文献の中で不登校との関連が考えられる 139 件について，キーワード毎に分類し，研究の概観をする。

Ⅱ　各キーワード毎の研究の概観

ここで取り上げる研究は，2006 年 5 月現在，PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS（PsycINFO データベース）において検索し，不登校との関連が考えられる 2005 年分として収録されている文献である。ここでは，日本の高等学校に対応する学年までの不登校との関連が考えられる文献を取り扱っている。

1　school attendance に関する研究の概観

2005 年の school attendance をキーワードに持つ文献は 372 件が見いだされる。これらのうち，ここでは 32 件を概観する。国別では，アメリカ合衆国が 22 件，英国が 7 件，スペインが 1 件，香港が 1 件，ナイジェリアが 1 件である。

Greig と MacKay（2005）は，認識行動療法を用いて，新しい治療介入，Homunculi の開発について概説し，アスペルガー症候群の中等学校の生徒への適用についてのケース研究を提示している。2002 年以来アスペルガー症候群の若者に認知行動療法を用いた調査研究は研究論文に掲載され始めたが，それらの文献では，アスペルガー症候群の生徒に学校で起こっている困難についての記述はなされていないという。アスペルガー症候群を含む自閉症スペクトラム障害の児童生徒や若者のかなりの数が特定され，ますますこれらの生徒が通常の学校に含まれているという。中心となる困難さに加えて，症候群においては，不安や抑うつ状態を含む心理学的な適応を伴う問題が，アスペルガー症候群の人々の間で高い割合で起こっており，教師，家族，若者自身に対して，登校することがかなりの要求をすることになるとしている。

Evans（2005）によれば, ADHD の児童青年は学校においてかなりの損傷を示しているという。破壊的行動，不十分な仲間関係，仕事を完成しないことが，これらの生徒には共通の問題であり，仲間の者たちよりも一貫して高い割合の落第，中途退学，懲戒行動につながっているという。個々の行動上の治療介入を展開する上で関係を考えることが常に重要であり，学校規模での治療介入の関係でなされるならば，治療介入の必要性が減少し，対象となる治療介入の成功が増加するかも知れないという。

Fernandez ら（2005）は，初期医療メディカル・センターに通う患者の間での健康不安の臨床的特性と展開を分析している。健康不安のある患者を特定するために，Whiteley 指標（WI）が 252 人の患者の対象者に用いられ，その後の臨床の評価に，標準化されたテストと臨床の面接が用いられたという。先行研究に 14 人の対象者が加えられたという。1 年後の追跡調査では，対象者の半分は，もはや用いられた厳密な健康不安の評価基準を実現しなかったという事実にもか

かわらず，著しい安定性が健康不安において見出されたという。追跡調査において，どんな変化も示さなかった対象者は，初期の評価で，強度の心気症の不安，医療上のあまり良くない評価，児童期の病気に関連する体験を報告する傾向があったという。健康不安は，慢性的な身体的不快と情緒的混乱と関連づけられるように考えられるという。

Bailey と Owens（2005）によると，ADHD の出現は白人とアフリカ系アメリカ人と同様であると考えられているが，白人よりもアフリカ系アメリカ人がほとんど診断を受けず ADHD に対する治療処理を受けていないという。アフリカ系アメリカ人と白人の応答者の間の文化的な違いを調べる調査から，アフリカ系アメリカ人が白人よりも ADHD になじみがない傾向があることが分かったという。アフリカ系アメリカ人は，白人よりもしばしば ADHD と診断され，学習上や行動上の問題を教師が白人よりもしばしば ADHD のせいにすると感じているという。健康に関する体制の障碍には，診断の前に多面的な環境で子どもを臨床医が評価しなかったり枠にはめたり偏見を持っていたりすること，文化的に有効なヘルスケアの提供がないことが含まれるという。これらの挑戦に打ち勝つ戦略には，地域社会の行事を通して ADHD の情報を普及し，文化的な適格性において臨床医の訓練を改善し，親，臨床医，教職員の間での交流を深めることであると述べている。

Bailey（2005）によると，注意欠陥/多動性障害（ADHD）は，多動性，衝動性，不注意によって特徴づけられる神経行動的障害であるという。ADHD の児童の多面的モデル治療処置研究での ADHD 治療処置に関する民族性の効果を展開する調査から，薬物治療の取り扱いへの反応だけが，行動上の取り扱い，薬物治療と行動療法の重複，日常的な地域社会のケアよりも大きかったという。行動療法に見られた改善が，民族性よりも社会経済的な状態に関連することを示しているという。ADHD の診断と治療処置の障碍，ヘルスケアの提供者，アフリカ系アメリカ人，スペイン語系アメリカ人の気づきを展開するには，一層の努力が必要であるという。

Kee（2005）によると，成績が低い香港の 4 校の年少の形態から募集された 384 人の生徒の対象者に対して研究が行われたという。研究結果によると，統制の外面性，否定的な家族と学校での体験，無断欠席が相関的であることが明らかになったという。統制，家族，学校での体験，無断欠席の統制の所在の中で見出された関連は，特に子どもの外的統制に対する信念を伸ばす文化において，教育と学校での社会事業に対して重要な意味があると述べている。

Valdez ら（2005）によると，学校心理学特別委員会の証拠に基づく治療介入の指針が，子どもの学校での行動を変える親の訓練と家族の治療介入の効果を評価するのに用いられたという。学校で行われた 90 人の親の訓練と 5 家族の治療介入には，学校治療処置の要素があったが，学校での変化の尺度が特定され，コード化されたという。結果によると，1 つの親の訓練プログラムと 1 つの家族治療介入が，2 つの任意に選択された臨床的試みに効果があると立証されたという。数家族の治療介入が効果があるか有望であったという。

McGee と Morrier（2005）によると，人員の準備に関する関連研究結果を調査し，情報を用いて，自閉症の子どもと成人の多様な必要性を満たす包括的な訓練計画を展開する経験に基づく

戦略を概説している。

Suveg ら(2005)は，分離不安障害，一般的に起こっている児童期の不安障害，パニック障害，若者には稀な不安障害を調査研究しているという。内在化する障害，外在化する障害と結びつくかも知れない登校拒否を調査していると述べている。

King ら(2005)は，エクスポージャーと介護者の係わり合いの必要性を強調し，児童の不安の問題の治療処置に用いられる認知行動戦略の概観を行っている。全般性不安障害，分離不安障害，社会恐怖，特定の恐怖症，登校拒否に対する経験的に支持された認識行動治療介入プロトコルでの展開に焦点を当てているという。多くは無視されてきた領域であるが，障害のある子どもの恐怖症と不安障害に対する治療介入の研究の状態についても考察しているという。

Yorgason ら(2005)は，家庭内家族療法と同様に，特定の個人，家族，地域社会の中の家族の特徴がどのように治療処置の応答に関連するかを取り上げている。児童青年機能評価尺度得点と全般機能評価得点を結果尺度として用いたという。結果によると，家庭内家族療法を受けた患者に対して，事前事後の得点の間に著しい差異が見られ，治療処置の成功の最初の指標を提供したという。

Brown と Trusty(2005)によると，学校の成績に対するスクールカウンセラーの努力に関する研究の文献を調査研究し，包括的なスクールカウンセリングのプログラムが成績を改善する仮説に対する支援はほとんどないと結論づけている。スクールカウンセラーが学校の成績を改善する戦略的介入を用いることができるという示唆を与える証拠があると述べている。

Dumas(2005)によると，破壊的な子どもと一緒にいる家族での不一致と闘争は，繰り返される実践によって過剰に学習され，自動化された厳密な行動様式を反映しているという。これらの様式はほとんどあるいは全く意識されずに行われ，変更に対して非常に抵抗されるという。親の訓練の新しい注意深さを基本としたモデルを紹介し，行動上(オペラント)の親の訓練とモデルの仮定を対照しているという。新しいモデルには，破壊的な子どものいる家族での自動化の把握を少なくするための促進的な聴取，遠ざけること，動機づけられた行動計画という 3 つの戦略が知らされるという。

Richards ら(2005)によると，専門家センターで見られる慢性疲労症候群の青年には，かなりの心理学的機能的損傷があるという。活動水準についての考えは，慢性疲労症候群の展開において重要であるかも知れないという。慢性疲労症候群の参加者は炎症性 Bowel 疾患の参加者と比較して，不登校を含む機能的損傷の尺度において統計的にかなり高い得点となったという。質問紙の回答に従って，慢性疲労症候群の参加者は，炎症性 Bowel 疾患の参加者よりも，統計的に運動よりも休息を好む傾向があったという。親の考えの比較では差は見られなかったという。慢性疲労症候群の若者は精神医学的障害に高いリスクがあるという。

Wang ら(2005)は，非行生徒の州全体の対象者と対応する普通の生徒との間の教育的欠陥での違いを評価しているという。非行生徒は，比較的低い成績評価と登校状況で，同じ学年にしばしば留まり，より多くの懲戒を受けているという。これらの記録された教育的欠陥は，非行

の過程において重要な役割を果たしており，非行の予防と治療処置とに関連して多くの公的政策の実施を引き起こすかも知れないと結論づけている。

Cullen-Powell ら（2005）は，通常の学校に通う情緒上の行動上の困難を抱えている子どもに対して立案された自己発見プログラム（SDP）について取り上げている。SDP の目的は，情緒的な幸福感を高め，自己認識を増加させ，自己規定の行動を促進する様々な実践的リラックス術を子どもに提供することであるという。10 歳から 13 歳の 14 人の女子，20 人の男子，計 34 人の生徒が SDP に参加したという。結果によると，子どもの自己効力感，社会的能力，コミュニケーション技術，学校での行動や登校状況において改善が見られたという。

Martin と Carroll（2005）によると，有効で効率的な評価は，学校改善，それぞれの生徒と教師の学級運営の進歩を支援する上で不可欠であるという。教育心理学者の集団は，学校改善を支援する上で見出される生徒の情緒的行動的発達を測定する項目を用いていたという。行動質問紙の導入をし，モニター治療介入の手段として，実行と可能性の容易さが評価されたという。ほとんどの利用者には，行動質問紙が役に立ち，完成しやすいということがわかったという。

Hammerness ら（2005）は，女性の発端者の一族性の問題を表す上で，喘息と ADHD の関連を評価している。ADHD の発端者の女性，統制群，親族のケース統制研究が用いられたという。参加者には，140 人の ADHD の発端者の女性，122 人の ADHD ではない対象者，それぞれ 417 人と 369 人の生物学的につながりのある親族が含まれていたという。発端者の ADHD と喘息の状態に従って，親族は 4 群に分けられたという。ADHD は発端者の喘息の危機を増加させなかったという。一族の集団の形態は，女性の発端者の家族での ADHD とぜんそくの独立した遺伝とほぼ一致していたという。結果から，ぜんそくと ADHD とは独立して家族において伝わるという女性の発端者の報告された研究結果に到達したという。

Blanchett ら（2005）によると，教育についてのブラウン対教育委員会・最高裁判決（1954）の判例は一般教育及び特殊教育体制でのアメリカ合衆国の歴史において，最も重要な出来事の一つであったという。すべての市民の等しい取り扱い，市民権と障害のある者の権利運動に対する基礎となるという点で，ブラウンは非常に重要視されているという。ブラウン以後 50 年，ブラウンの約束の多くが，都会に住む有色人種の生徒，貧困に置かれた生徒，障害のある生徒に関して十分には満たされていないという。

Gesinde（2005）は，ナイジェリアのオヨ州での中等学校での怠学行動に対する子ども，家族，学校，社会，政府の要素のそれぞれあるいは結びついた貢献度を調査研究している。540 人の生徒が，多くの段階で目的を持った標本抽出技術を通してオヨ州の 3 つの上院議員選挙区から選ばれたという。4 つの有効な手段で，対象者からデータを収集したという。多重回帰分析と t-検定値をデータ分析に用いたという。5 つの独立変数が，怠学行動において観測された変化のあわせて 66.0%を占めることが明らかになったという。それぞれの 5 つの独立変数が従属変数を予測する貢献を示したという。潜在的力段階では，政府変数は，怠学行動を予測する上で最も高い貢献度を示し，学校，子ども，社会と家族の要因が続いたという。

Rumberger と Palardy（2005）は，高等学校の成績の幾つかの異なった指標，テストの点数，中途退学率，転校率，消耗率の間の関係を調査研究している。階層的線型モデルが，1988 年の国家教育縦断調査に参加した 14,199 人の生徒の対象者からパネルデータを分析するのに用いられたという。結果によると，学校の有効性の共通の視点と対照的に代替手段の考えを支持しているという。成績を上げる，生徒の学習を促進する上で有効な学校は，中途退学や転校の割合を減少させる上では必ずしも有効ではないという。

Diamond（2005）は，幼い子どもの成長に関する早期の治療介入の影響についての理解を進める追跡研究を行っている。間接学習や直接教授の就学前に子どもが体験した早期の児童の教育課程が寂しさ，学校生活の質，抑うつ状態の青年男女の自己報告の割合と関連するという証拠は追跡研究では見られないという。直接教授就学前教育課程に参加した児童に対して，青年期での非行の高い割合が見られたという初期の研究の結果と，これらの研究結果は対照をなしていると述べている。

Jeynes（2005）は，都会の初等学校の親の環境と成績の関係について，41 件の研究の分析研究を行っている。分析から親の環境全体と環境の下位分類に対して有効な規模が決定されたという。結果から，親の環境全体と成績の間の重要な関係が示されたという。親の環境は全体として，標準偏差約 0.7～0.75 の成績の変域で関連していたという。この関係は，白人や少数民族，男女間で保たれていたという。

Campbell と Wright（2005）によると，1990 年代後半に，州の大部分が満足できる登校状況に対する福祉予算援助を関連づける方針が採用されたという。福祉改革の道筋の前に，1996 年に 7 つの登校状況の条件についての評価から証拠をまとめているという。カリフォルニア州の 1 学区の再構築後のプログラムの事例研究を提示しているという。ケース管理の資源を扱わないプログラムでは，登校状況をほとんど改善しなかったという。これらのプログラムは，病気よりも怠学が登校上の問題の主要な原因であるという不完全な仮説を補強しているという。

Bussing ら（2005）によると，2 年間の注意欠陥多動性障害（ADHD）の薬物療法治療処置と関連する学校での援助の割合を記述し，これらの治療介入の独立した予測因子を調査研究することを目的として研究を行っている。266 人の親子面接と 220 人の 12 ヶ月の追跡電話調査が，ADHD の危機の審査をされた小学校区規模の層状無作為抽出対象者に対して行われたという。子どものおよそ 1/3（35%）が 2 年間の ADHD の薬物療法を受け，第 2 段階で治療処置をされ，第 3 段階でおよそ 1/3（36%）が薬物治療を受けなかったという。男子は ADHD の薬物治療を女子の 2 倍以上受けているかも知れないという。児童のおよそ 1/4（28%）が学校の援助に関わり，2 年間以上継続したという。アフリカ系アメリカ人の若者は，白人の子どもよりも学校の援助を受けていたという。

Roth と Fonagy（2005）は，「だれのためにどのように働くか」，言いかえれば，精神療法治療介入はどの患者集団に対して有効であるのかという質問に答える証拠を特定し概観しようとしている。臨床的実践に精神療法の研究者によって用いられた方法論と，研究結果の適応を制限

する方法について概説している。

Dew と Bickman（2005）によると，療法に関する患者の期待によって，特別の技術やアプローチに特定されない療法の特徴である共通の要因が考察されたという。患者の改善，消耗，治療同盟を含む期待と要因の間の関係についての結果を強調している期待についての文献から，児童青年の研究を，含んでいるという。結果によると，期待は患者の改善と治療同盟と関連するが，期待と消耗の間の関係はサポートしていないという。

Edmunds ら（2005）は，入学時児童健康調査の実行可能性を評価するために，入学した年の児童の多面的な健康を獲得し，データの質，信頼性，妥当性を評価しているという。2 つのロンドンの自治区の 10 校の小学校から 278 人の 1 年生の親から質問紙を得，学校看護婦が，親が同意した子どもに対する健康と教育記録から個別の質問紙を実施したという。資格のある親に対して，資格のない親では，子どもの評価としてかなり多くの行為上の問題，仲間との問題，総合的な精神健康上の問題（$P<0.01$）があり，CHQ-PF28 による評価では，かなり低い総合的健康（$P<0.01$）となっているという。特別支援教育が必要な子どもと長期の病気や障害のある子どもでは，このようなことのない子どもよりもかなり低い総合的健康（$P<0.05$）となっているという。

Walker ら（2005）によると，学校特性と社会経済的状態を含む遺伝的および共有された環境影響を除いて，兄弟姉妹が同様にならない環境の影響のような共有されない環境では，成績における変化の 19%を占めるという。成績に対する共有されない環境の影響の重要性は，これらの子どもの特定の体験が，同じ家族，学校，教室で子どもによって共有されないかも知れないと述べている。

Taylor と Lopez（2005）によると，成績，学校での約束，問題行動と，例えば家族の日常的な流れ，親の達成への期待のような家族管理実践についての母親の報告の関係が，アフリカ系アメリカ人の母親と青年男女で評価されたという。研究結果によると，家族の日常的な流れは，成績と青年男女の登校状況，学業への注意，挑戦への感覚と肯定的に関係し，学校での問題行動と否定的な関係にあるという。母親の期待は，子供の登校状況に明らかに関連していたという。登校状況と注意は，肯定的に成績と関連し，否定的に問題行動と関連づけられ，成績と問題行動により，家族の日常的な流れを調整していたという。親の期待への青年男女の感覚は，成績と肯定的に関連していたという。

Drapela（2005）によると，およそ 40 年間の調査後に，高校中退と触法行為との関係は不明瞭なままになっているという。結果によると，中途退学と薬物使用の 2 つの変数には互いに弱い関連があり，学校規律上の問題や薬物使用の中途退学前の段階のような中途退学への前例が，中途退学状態よりも中途退学後の青年男女の薬物使用についての実質的影響があり，中途退学とその後の薬物使用双方における弱い関係の影響が，青年期の逸脱における社会統制理論見解と一致しているという。

Karcher（2005）によると，変化に通じる実際の結果と過程よりも，年齢がまたがる教育のあり得る結果に関してはるかに多くの文献が書かれているという。6 カ月の発展的教育後に，教育

を受けた結果について，生徒の出席の効果を調べているという。発展的教育は，結び付きを容易にすることによって，子どもの発達を促進するように立案された構造化された年齢のまたがる仲間の教育課程であるという。回帰分析によれば，自己効力感，社会的技能，行動上の能力における変化が生徒の出席の効果にかなり相関し，示唆される関係過程がプログラム課程よりも多くの変化の原因になったという。生徒の矛盾した出席と自己効力感，行動上の能力での生徒の減退との関係は，休んでいる生徒の利益よりも危害を加えられるかもしれないと述べている。

２　school dropouts に関する研究の概観

2005 年の school dropouts をキーワードに持つ文献 190 件のうち，関連の考えられる 42 件について概観する。国別では，アメリカ合衆国が 38 件，イタリアが 1 件，カナダが 1 件，オランダが 2 件である。

Adamo ら（2005）は，ナポリの青年男女の中途退学に関わる実験的学校プロジェクトに，精神分析的方向性を持つ心理療法士の長期の体験を記述している。これらの破壊的な青年男女と関わるワーカーをサポートする心理学的プロジェクトの構造が，背景にある理論的枠組みに添って詳細に分析されるという。青年男女と成人の関係とコミュニケーションと仲間集団で観察される作業と意味のある発達の分野で強い力動を示す記述がなされているという。

Sanchez ら（2005）は，都会のラテン語系アメリカ人青年男女の成績についての帰属意識と性の役割について調査研究することを目的としている。帰属意識は男性と女性の学校での適応において異なった役割を演じると期待されたという。143 人の参加者には，都会の大規模高校から，ほとんどメキシコ系やプエルトリコ系の上級生が含まれていたという。評価された成績には，評価点，長期欠席，動機，努力，教育的熱望，期待が含まれていたという。女性は男性よりも肯定的な成績になっていたという。学校への帰属意識は成績への動機，努力，長期欠席を含む学校での結果をかなり予測したという。回帰分析からは，性別が帰属意識と成績との関係での違いを説明するということを示さなかったという。

Zirkel（2005）は，school dropouts にも関連するが，school attendance で取り上げることとする。

Hubbard,（2005）によると，非常に成功した低収入の 30 人のアフリカ系アメリカ人公立高校生に関わる研究結果に焦点を合わせる。生徒の性別に基づく体験は，少数民族群と関連づけられる教育的低達成の伝統的形態を無視するものであるという。学校，家族および地域社会での文化との関連は，性別による態度と信念とを創り出しているという。生徒が民族的階級的アイデンティティを共有するときでさえ，性別は，学校内外で，強く知覚と行動を調停するかもしれないと述べている。

Sirin（2005）は，1990 年と 2000 年の間に刊行された雑誌記事での社会経済的状態と学力達成度に関する文献を概観している。対象文献には，74 の独立している対象から収集された 128 学区，6,871 校，101,157 人の生徒が含まれているという。この関係は，社会経済的状態変数の単位，ソース，変域，社会経済的状態達成尺度によって加減されという。

Knight（2005）によると，教育の伝統的アメリカモデルに生徒が適さない時にしばしば危機的状態にあり，特に有色人種の生徒では，物理的に攻撃され，経済的に不利な状態に置かれているという。芸術の教師には，授業中に危機的状態に置かれた生徒がいるという。危機的状態にある生徒をどのように期待し，仮定するかについてのステレオタイプ的な考えなしには，どのように危機的状態にあるかを認識するだろうかという。学習する本物の機会があり，十分な可能性に到達できるように，芸術の教師が危機的状態にある生徒により良いサービスをどのようにすることができるかということが更に重要であるという。

Vander ら（2005）は，発達過程検査プログラムの実施とプログラムの実行可能性，受容性，生産高の評価を述べている。参加しているシアトルの 4 校の 6 学年の中で，861 人（83%）が検査されたという。情緒的苦痛に対して積極的に検査を受けた生徒は，検査された生徒の 15%であったが，児童精神健康専門家による構造化された臨床的評価を受けたという。評価された 71%の生徒は，59%が家庭教師，スクールカウンセラー，地域共同体の精神健康サービスを受けているが，重要な情緒的苦痛を体験していることがわかったという。クラスにおける検査の成功している実施を，発達過程検査プログラムと学校職員との強い共同作業が容易にしたという。

Nix ら（2005）は，行動上の問題に対する危機要因と低い精神健康治療処置への参加との関係が，多面的な活用しやすい関係で統合された予防的サービスの提供によって衝撃を吸収させることができるかどうか調査研究している。55%が少数民族の 1 年生の児童のいる 445 人の家族は，4 つの様々な地域に住んでおり，行動上の問題の最初の徴候に対して選択されたという。結果によると，実際の環境の下でこれらの子どもと家族とは，学校を基盤とするサービス，治療集団，家庭訪問に高い割合で参加したという。

Zhang と Joy（2005）は，特別支援教育教師の指導者の見解から，高校と中等学校の移行実践を調査研究しているという。結果によると，大部分の学校が，機能的な教育課程，社会技術訓練，一連の学校を基盤とする機能的な学習の機会を提供しているという。多くの学校では，適切な雇用技能開発と機能的査定を提供していなかったという。移行計画における代理者のかかわり合いは不十分だったと述べている。

Wigfield ら（2005）は，中等学校のカウンセラーに対する研究の関係と早期青年期の期間に起こっている生物学的，認識的，自己同一性，動機づけの変化に関する最近の研究に焦点を当てている。特別な配慮を受ける学校でのいじめの問題によって，早期青年期での仲間の影響についても論じられているという。教師と生徒，カウンセラーと生徒との積極的な関係がどのように移行を緩和することができるかに関して，研究が行われているという。早期青年期の発達上の必要性に敏感なように中等学校のカウンセラーの役割を再構築するための示唆に添って，生徒の中等学校への移行を容易にするように立案されたカウンセリングのプログラムの積極的な効果を述べている。

Kamphaus ら（205）によると，心理学的サービスを求める要求が増加し続けるに従って，個性と行動の評価は主要な活動であり続けるという。児童青年を扱う時，心理学的評価はさらに大

きい挑戦を示すことができるという。同時期の評価実践に必要な心理学的知識の基本に関する児童青年の個性と行動の概観を提供するという。

Olatunji（2005）は，メキシコ出身の青年男女の間での早い段階での高校消耗に関する仕事の体験の効果を調査研究したという。この集団に対する仕事の結果の潜在的予測因子として，同化を考慮に入れる理論的モデルを提案しているという。1990 年での中途退学に関する 8 年生の仕事の体験の効果を評価するために，1988 年の国家教育縦断研究のデータをを分析したという。国家の最も大きい民族的少数民族集団であるスペイン語系アメリカ人の大部分を包括するだけでなく，驚くほど低い高校卒業率を示すために，メキシコ出身の若者では特に顕著であると述べている。メキシコ出身の十代の若者の間では，仕事と他の要因を統制した後で，女子では，男子よりも 3.5 倍も中途退学しているという。

Lichtenstein（2005）によると，研究者は学習共同体の定義の特徴に通常焦点を合わせ，それらの特徴がどのように生徒の成績に影響を及ぼすのかをしばしば調査研究をしているという。様々な形態の学習共同体プログラムを通じた構造的なプログラム上の変数が，成績と社会的成果に効果があるかどうかを研究者は評価しているという。生徒の成績の差異と尺度の間の関係と１学年の学習共同体のプログラム内のセクションの中での違いに焦点を当てているという。

Katsiyannis ら（2005）によると，障害のある生徒に対する卒業後の最大化結果において，有効な移行計画は，最高に重要であるという。精神遅滞の生徒に対する移行計画に関する国家縦断移行研究 2 からのデータを調査研究をすることが目的であるという。目的比較として，情緒障害及び行動障害（E/BD）と学習障害（LD）に対する移行計画に対するデータも調査されたという。(a)研究結果から，精神遅滞（MR）の生徒の約 60%が 14 歳までに移行計画を開始しているという。(b)精神遅滞の生徒は，約 10%が全く参加していないというように移行計画にほとんど参加しておらず，半分以下の参加であり，入力もあまりなされていない状態で，どんな進歩も生徒の他の２群よりも移行目標に対して報告をなされないと考えられるという。(c)精神遅滞の生徒の移行計画での通常教育の関わりは，関連するサービスの職員が関わっているけれども，最小であったという。(d)精神遅滞の生徒のごくわずかが，移行目標として，中等教育後の教育を受け，大部分は移行目標として雇用を保障し支援を受けたという。(e)精神遅滞の生徒は移行計画に関わる他の代理の職員との関わりが必要であると考えられると述べている。

Wang ら（2005）によると，非行生徒と対応する通常の生徒の州全体の対象者の間での教育的欠乏での差異を評価しているという。非行生徒は，比較的低い評価を受け，比較的貧弱な登校状況であり，しばしば原級留置となり，比較的多くの懲戒行動を受けているという。これらの記録された教育的欠乏が，非行の過程で重要な役割を果たしており，非行の防止と処置と関連して，多くの公共の政策実施を引き起こすかもしれないと結論を下している。

Anderson ら（2005）によると，子どものストレスの多い人生の出来事の格付けを調べる先行研究では，子どもが 6 年生になる時までに，原級留置になるよりも，盲目になり親を失うことを恐れることを示していたという。5 校の異なった学校の 1 年生，3 年生，5 年生の生徒が，20

の人生の出来事のストレスについて評価をされたという。学年にまたがって，最もストレスが多いと生徒にみなされた出来事は，親を失うこと，原級留置，盲目になること，窃盗で捕まること，学級内で孤立すること，貧弱な成績，操作，夫婦げんか，校長先生の呼び出しであるという。全体的に見て，この研究における生徒の格付けは，先行研究の研究結果と一致していたという。1 つの違いは，最もストレスが多い人生の出来事として，6 年生の生徒によって原級留置が評定されていたが，それは先行研究では 3 年生に高い状態で格付けされていたという。

Calhoon（2005）によると，読解障害の 6 年生～8 年生の中等学校の生徒に対する音韻論の技能と読解の教育に関する仲間に調停された教育的アプローチの効果を評価することを目的としている。38 人の生徒が 3 年生以下の段階で，学習障害と読解障害と特定されたという。結果によると，生徒は，対照群よりも Achievement-III の Woodcock−Johnson Test を用いて，文字と言葉の特定，言葉の攻撃，および過程の理解に優れている言語学技能訓練，仲間支援学習戦略教育を受けている生徒で条件の間での重要な違いが示されたという。

Kogan ら（2005）は，1988 年の国家教育縦断研究の 1990 年と 1992 年の追跡調査に参加した 1,762 人のアフリカ系アメリカ人の調査に基づき，薬物乱用の開始と急速な増大における高等学校中途退学の役割について研究を行っている。1990 年には，大部分は 10 年生，ほぼ 16 歳で，すべて生徒であったという。後に薬物乱用につながる先の問題行動の関係についての仲介効果と薬物乱用に対する中途退学の一義的な貢献を調べることにおいて経路分析モデルが用いられたという。中途退学した若者は，タバコを 1.6 倍，大麻を 1.3 倍吸っていたという。部分的な仲介効果が，タバコと大麻の使用と問題行動に対して出現したという。

Appleyard ら（2005）によると，児童の行動結果に関して同時に起こる危機要因の有害な影響について，累積的リスク研究がなされているという。文献では，発達上の様々な観点で累積的リスクの潜在的な特異的影響を表しておらず，行動結果に関して敷居値のモデルや線型リスクモデルがより良い記述をするかどうかについての問いをそのままにしているという。児童虐待，親間の暴力，家族分裂，低い社会経済的状態，高い親のストレスのような青年期の児童の行動結果に関する早期及び中期児童期での累積的リスクの影響を調査研究しているという。171 人の危機的状態にある都会の児童の縦断的研究のデータを用いて，早期及び中期児童期にわたるこれらの 5 つの危機要因の累積的リスクを調査研究しているという。研究結果によると，早期児童期のリスクの数が青年期での行動の問題を予測するという累積的リスクの仮説が支持されるという。累積的リスクの敷居値モデルではなく線型モデルに対する証拠が見出され，リスクが多く存在すればするほど，子どもの結果が悪くなるという。

Buxton（2005）によると，教育機会に触れることのない生徒に対して，厳密な科学，数学，技術の経験を提供する願いに基づく半日の都会の人を引きつける高校の 3 年の研究を報告している。学校環境内で教育を受けた人が文化的にどのように創られていくかについて理論的なレンズを用いて，(1)選択された生徒のアイデンティティの制度上の構造，(2)このアイデンティティを生徒が取り上げ，変更する方法，(3)生徒の期待の緩やかな制度上の変更で，生徒の発案が

どのように役割を果たしたかを論じているという。

Crosnoe ら（2005）によると，メキシコ系アメリカ人の人口と若者の年齢構造の急激な増加は，メキシコ系アメリカ人の若者の長期的見通しに関する増加した注意に焦点を当てているという。同化が全体として，メキシコ系アメリカ人に対する長期にわたって，積極的結果，否定的な結果のいずれをもたらしたかを決定するために，学校内外での若者の間の，世代的な相違を展開しているという。一連の青年男女の健康についての国家縦断研究の論理回帰モデルから，学籍登録している学校の生徒集団の個人間，行動上，人口統計学的特徴により，世代的形態が変化しているけれども，学習上の失敗と肥満の危機の割合がメキシコ系アメリカ人の若者の二世で比較的高いという。

Barrett と Turner（2005）によると，家族起源の構造によって，精神的健康の違いを数多くの研究が明らかにしているが，これらの形態を形成する議論が残されているという。フロリダ州マイアミ−デイド郡の 19〜21 歳の若い成人の対象者を用いて，家族形態に相関すると推定される 3 点，社会経済的状態，家族過程，社会圧力の段階という解釈上の意味を調べている。先行研究と一致し，母父の家庭と比較して，義理の家族，一方の親の家族，他の親類がいる一方の親の家族の出身の者で，より高い水準の抑うつ的徴候が明らかになったという。

Greenfield（2005）によると，あまりにも頻繁に，学習過程での感情的力の強力な役割を理解するよりも，興味あるいは知識の不足の証拠として，教育者は生徒の失敗を素材を理解しないことと曲解しているという。恐怖あるいは疎外を体験するとき，生徒の認知能力は特に危険にさらされるという。意味のある関係を促進する所属している学級環境に精力的に没頭しているとき，生徒は知的な危険を冒すことから離れ，十分な学習上の達成がなされるという。知識構造を形成する際の重要な力としての感情の役割は，学級の教育者によって過小評価されているという。より強い教育学的アプローチを形成するために，感情の領域の中心的位置のより良い評価を実践者が得られるように，具体的な指示を提供しているという。

Herschell と McNeil（2005）によると，親子相互関係理論（Eyberg と Calzada（1998），Hembree-Kigin と McNeil（1995））は，外在化した行動上の問題を表している 2 歳から 6 歳の子どものある家族を治療処置するために，元々立案された経験的に支援された治療処置プログラムであるという。ここでは，治療処理の理論的基礎と対象を初めに記述することによって親子相互関係理論の概観を行っているという。

Entwisle ら（2005）は，高い中途退学率の高貧困都市，バルチモアの高校生の中途退学の可能性に雇用がどのような影響を与えるかを展開しているという。15 歳の者の中で，芝刈りやベビーシッターのような十代の仕事をしている者は，製造や事務のような大人のタイプの仕事をしている者の 1/3 以下の中途退学の可能性であるという。16 歳では，中途退学の危機を減少させた十代の仕事と比較して，大人のタイプの仕事を継続しているために逆転しているという。15 歳と 16 歳以上の者でも，仕事の形態は中途退学の危機に影響を与えているという。仕事を継続し，規則的な転職をしている生徒では，無秩序な転職をし仕事を継続している生徒よりも中途

退学の可能性が少なかったという。

Warren と Jenkins（2005）は，フロリダ州とテキサス州での高等学校出口試験が，高等学校中途退学率と，高等学校中途退学率における民族人種社会経済的不平等に関連があるかどうかを調査研究している。1968～2000 年の 10 月現在人口統計調査のデータを用いて，結果変数として，最初に 1971～2000 年の卒業学級を考え，何らの高等学校信任状も得ることなしに生徒が学校を離れたかどうかの尺度を用いたという。次に結果変数として，1971～2000 年の卒業学級を考え，中途退学として，一般的な等価の卒業証書を得た生徒を分類する尺度を用いたという。どちらの場合でも，州の高等学校出口試験が高等学校中途退学率や中途退学率の大きな不平等と関連するという証拠を見出すことはできなかったという。

Wong（2005）によると，Hirschi の統制理論（1969）は，社会的結合の要素として，環境が非行を減少させるということを目的としていたという。調査研究では，環境の効果はむしろ弱かったという。社会設定変数と特異変数として係わり合いを引き起こす Hirschi の関係仮説を再構成しているという。西カナダ州の都市の 7～12 年生の生徒の対象者に基づいて再構成仮説が調査研究されたという。結果によると，学校関連と家族に関連する活動は，社会的結合を強化し，非行的関係と非行を減少させたという。友人と時間を過ごしたりデートするような他の従来の活動は，反対の効果を与えたという。社会的結合と非行の関係を通して，非行に関する特異な関係の間接的効果が，直接的効果よりも大きかったという。

Darling ら（2005）は，6 校の生徒における学校基盤の課外活動への参加と飲酒，大麻使用，学習態度，学習意欲のような青年男女の適応との間の関係を調査研究している。より良い適応をしている生徒の選択的課外活動参加の潜在的混乱と適応尺度，青年男女の人口統計学的特徴と活動形態の関数としての課外活動参加と適応の間の関係の強度の変動性，課外活動参加と適応の間の関係の仲介者としての仲間の役割について論じている。人口統計学的特徴と先行する適応を統制すると，課外活動に参加した青年男女は，高い評価と学校に対する積極的な態度，比較的高い学習意欲を報告したという。アルコールと大麻使用は，課外活動参加と独立には関連づけられなかったという。課外活動参加と適応の関係は，人口統計学的特徴によっては異ならず，仲間の特徴によっても仲介をされないようであったという。スポーツ以外の課外活動参加者は，課外活動に参加しなかった者とスポーツに参加した者よりも比較的良い適応を示したと述べている。

de Bruyn（2005）は，中等学校への移行につながる役割特性と成績の関係を調査研究している。学習上の契約が，役割特性と成績を仲介すると仮定されたという。中等学校の最初の年に当たる 749 名が対象者であったという。親，教師，学校，仲間という 4 つの形態の役割特性が調査研究されたという。学習契約を通して仲介されて，親と教師の役割特性は成績と否定的に関連していたという。親と学校の役割特性は，成績と直接否定的に関連していたという。

Spera（2005）は，子育て実践，子育てスタイル，および青年期の成績の関係に関する文献を概観している。実証的研究の概観から，親のかかわり合いと聴取が，青年期の達成の強力な予測

因子であることが示されたという。これらの研究結果から文化的，民族的，社会経済的状態にわたって一貫していないけれども，権威的子育てスタイルがしばしばより高いレベルの成績と関連づけられるという。子育ての Darling と Steinberg の文献上のモデルは，これらの食い違いを解決する有望なモデルを提供しているが，一層の調査研究が，モデルの主要な関連を調べるのに必要であるという。

Sinclair ら（2005）は, 情緒的行動的障害のある都会の高校生の卒業を促進し中途退学を減少させる対象とした長期治療介入の有効性を調査研究している。アフリカ系アメリカ人 67%，男性 82%が，対象者の主要部分を構成しているという。若者の大部分は 4 年間の追跡調査をされ，残りは 5 年間の追跡調査をされたという。プログラムの結果には，比較的低い中途退学率と移動率, 比較的高い継続的な登校率と学籍登録率, より包括的な変革計画が含まれているという。

Suh と Satcher（2005）は，韓国系アメリカ人の中途退学に対する危機の原因となる変数を調査研究し, 可能な治療介入戦略を 10 人の韓国系アメリカ人青年との面接を通して展開しているという。疎外感，援助がないことと希望がないという感覚，援助を求めることという 3 つの主要なテーマが危機にある生徒に現れていたという。

Christle ら（2005）によると，落第，除外懲戒，中途退学は学校から刑務所へのパイプラインでの重要な要素として特定されているという。調査研究の強い実体は，非行に対する危機に存在するけれども，これらの危険を悪化させるか打ち消す学校内での変数を理解しようとする研究はほとんどなかったという。初等学校，中等学校，高等学校それぞれの落第，停学，中途退学と非行と関連づける 3 つの学校の特徴を調査研究する 3 つの多面的な研究を行ったという。学校段階での特徴は，若者の非行に対する危機を最小化するという。法廷にかかわった若者の大部分が，落第，学校除外，中途退学を体験したという。他の研究者のものと関連して， 研究結果では，若者の中で法廷にかかわり合う危険を悪化させるか，緩和させる学校を基盤とする政策と実践が特定されたという。

Finn ら（2005）は，K-３の早期の学年での小規模学級への参加が高等学校の卒業に関係するか, K−３での成績が高等学校の卒業に関係するか，学級規模が高等学校の卒業に関係するのであれば，生徒の成績に関する小規模学級に参加する効果によって，その関係が説明されるかという早い時期の学校での体験の長期の効果についての３つの質問を取り上げている。研究には，プロジェクト STAR のテネシー州学級規模実験の 4,948 人が参加したという。分析によれば，卒業は K−3 の成績と関係し, 3 年間以上の小規模学級の参加は高等学校卒業の可能性を増加させ，特に自由昼食が適格な生徒で特に顕著だったという。

Cho ら（2005）は，危機的状態にある高校生の予防プログラムの有効性を調査研究する目的で研究を行っている。2 つの異なった都会の学区から別々に有効性の試みの評価をされデータは得られたという。1,218 人の生徒が参加し，50%が男性，平均年齢は 15 歳であったという。肯定的な有効性のある試みの効果は再構成されるか，否定的な行動上の効果は危機的状態にある若者が集まったときに見られるかをテストしたという。混合されたプログラムの効果が介入直

後に見られたけれども，否定的な効果が 6 ヶ月の追跡調査にのみ見出されたという。

Stone ら（2005）によると，サマースクールプログラムの拡大が難度の高いテストの増加の使用につながったという。これらのプログラムの中で生徒の体験に焦点を合わせている調査はわずかであるという。多面的な方法を用いて，シカゴの公立学校のサマーブリッジプログラムに出席した成績の悪い生徒が，夏の学習環境をどのように認識したのかを調査研究したという。生徒はその学年と夏の間に学習上の圧力と人格主義での実質的な増加を報告したという。

Rumberger ら（2005）によると，テストの得点，中途退学率，転校率，消耗率のような高等学校の様々な達成指標の関係を調査研究しているという。階層的線型モデルが 1988 年の国家教育縦断調査に参加した 14,199 人の対象者からのデータを分析して行われたという。学校の有効性の共通の視点とは対照的に代替手段の意見を一般に結論は支持していたという。達成における成長のような生徒の学習を促進することにおいて有効な学校は，中途退学率や転校率を減少させることで必ずしも有効ではないという。実際に，生徒の入力に対する統制後に，高等学校では中途退学率の比較的小さな可変性にもかかわらず，転校率はかなりの変化を示していたという。

Beekhoven と Dekkers（2005）は，比較的低い二次職業上の男子が非常に早く学校を去る理由を評価している。様々なソースから定量的定質的データのユニークな組み合わせにより，初等学校と高等学校の期間に関する国家的集団の研究から，これらの男子に関する背景となるデータが提供されたという。早い時期に学校を離れることに関して熟慮した面接が行われたという。一群のデータの見地から，男子自身の熟慮が解釈される 4 つの事例研究が示されているという。いくつかの要因が同時に早く学校を去ることに貢献するが，学習上の問題，動機の不足，誤った職業上の選択から起こる問題が強調されたという。特定の個人的問題も，学校キャリアに否定的に影響していたという。男子は学校から遊離するようには感じないが，学習することを楽しまず，仕事を始めた方がましだと感じているという。

Flay と Collins（2005）は，問題行動予防介入の学校を基盤とする評価方法における展開の歴史的概観を提供しているという。学校を基盤とする介入調査研究で用いられているデザインと統計的方法論が，過去 20 年間にわたって著しく進歩してきたという。方法論の進歩，結果の公開，知識の蓄積において引き続き起こる計画，タイミング，維持が，高い質の学校を基盤とする介入研究を行うことにおいてすべて重要であると述べている。

Sirin と Rogers-Sirin（2005）は，学校契約の様々な要素がどのようにアフリカ系アメリカ人の青年男女の成績に貢献するのかを調査研究している。対象者は，9 年生から 11 年生の 499 人のアフリカ系アメリカ人の青年男女から構成されていたという。青年男女の性別，学年，認識的な機能，親の教育がどのように学校契約に影響し，学校契約が生徒の背景要素を通して成績に貢献するかを調査研究したという。確定的な因子分析では，学校特定，学校参加，学校期待という 3 つの要素により概念的な学校契約モデルを支持したという。結果によれば，性別，認識的な機能，母親の教育が学校契約に関連するのが明らかになったという。

Mitchell（2005）によると，カリブ系アメリカ人は，アメリカ合衆国の黒人人口の最も大きな集団の一つであり，低い学校での成績と高い中途退学率を示し，一生否定的な雇用と心理社会的結果とに関連するという。移民の状態がこれらの人々の学校での成績にどのように影響を与えるかを理解するために，200 人のカリブ系アメリカ人青年男女がテネシー自己概念尺度と人口統計学的質問紙を行ったという。変数の分析の結果によると，学校の自己概念に対する世代的状態の重要な効果が明らかになったが，後づけ解析では，カリブ系アメリカ人青年男女の第 1，第 2，第 3 世代に対して，平均学校自己概念得点には重要な差異は見られなかったという。

Bornstein（2005）は，依存する患者と効果的に働くことに関して記述している。最先端の治療処置技術について論じ，依存を分析するための戦略を概説し，正式の診断評価基準によっては得られない依存に関連する個人の力学を評価するための手順を概観している。依存は，臨床的実践では重要な問題であるが，人間の体験の遍在している特徴でもあるという。結局，我々の初日から最終日になるまで互いに縛られる社会的な生物であるという。依存する患者がいる有効な臨床の仕事は，すべての形態で依存を破棄するが，不健康な依存を健康な結び付きと取り替えることはないと述べている。

3　school phobia に関する研究の概観

2005 年の school phobia をキーワードに持つ文献 252 件のうち，関連の考えられる 39 件を取り上げる。国別では，アメリカ合衆国が 27 件，英国が 2 件，オーストラリアが 3 件，イスラエルが 1 件，チリが 1 件，中国（香港）が 1 件，スペインが 1 件，インドが 1 件，クウェートが 1 件，イタリアが 1 件である。

Biederman ら（2005）によると，パニック障害と大うつ病に対する重複障害の形態に関する重要な加減効果のあるものとして，成人の例に言及したこれまでの研究結果での大うつ病を取り上げている。ここでは，重複障害のこのような形態が，関連する傾向によって軽減されるかどうかを明らかにすることであるという。パニック障害（PD）と大うつ病（MD）が，1,031 人の臨床的照会では確認されなかった成人の対象者からのデータを用いて，重複する精神医学的障害と機能的な結果に対する危機を予測するのに用いられたという。参加者は，児童期と成人期の重複する精神医学的障害を評価するために構造化された診断的面接方法論によって，包括的に評価されたという。PD は MD の如何にかかわらず不安障害に対する危機を増加させたという。MD は，PD の如何にかかわらず，躁病，非社会的人格障害，精神活性物質常用障害，破壊的行動障害，過剰不安障害，社会恐怖，全般性不安障害に対する危機を増加させたという。これらの結果は，MD が PD に対する重複の形態に関して重要な加減効果があるという以前に報告された参照されていない実例を拡張し，PD に対する重複の形態が参照された傾向のためではないということを示していると述べている。

Etkin ら（2005）によると，精神療法はさまざまな精神疾患を扱うのに一般的に用いられているが，驚いたことに，その生物学的メカニズムに関して，特に薬物療法との比較では，ほとんど知られていないという。精神療法の治療介入に続く脳の機能における現在の画像診断法の技術

で，検出可能な変化に関する現在の知識について調査研究をここでは行っている。臨床上の意志決定と精神療法の認知神経科学の双方に役立つ臨床的診断を精選し，治療処理の結果を予測する際に，画像診断法の可能な役割を考えていると述べている。

Saxe ら（2005）によると，心的外傷を受けた子どもにとって有効な治療介入の発達における主要な挑戦の 1 つは，子どもが心的外傷の出来事に曝される危険に置かれる同じ要因が，また，不安な社会的環境に影響するということであるという。心的外傷を受けた子どもは，家庭内暴力，児童虐待，親の精神疾患，薬物乱用によって特徴づけられる環境，子どもの発達を阻害することが示される条件に，しばしば生活しているという。心的外傷を受けた子どものケアの革新的モデル，トラウマシステムセラピー（TST）の開放的な試みの結果を記述している。TST は，子どもの心的外傷に関連する兆候と社会的環境において持続する要因の両方を記述するように立案されているという。

Hudson（2005）によると，Davis と Ollendick（2005）は，認知行動療法治療者に対して，情緒的反応の認知的，行動的，生理的尺度が含まれる恐怖症の若者と衝動の治療処置における主観的な恐怖と診断環境の尺度を超えた挑戦をさせているという。児童青年の不安の現在の測定が情緒的反応を評価し，これらの 3 つの要素の確実で妥当な尺度に対する必要性を論じる方法を強調している。不安のある若者に対する認知行動療法での変化のメカニズムの現在の証拠の幾つかを概観し，この領域における将来の研究の必要性を強調している。

Davis と Ollendick（2005）は，児童期の特定恐怖に対する経験的に支持された治療処置を，生物情報理論（Lang,1979）を用いて，概観し，批評しているという。これらのこころみにおける治療処置は，変化の異なった基本的な原理に基づき，恐怖の総合的な主観的体験と同様に，生理学，行動，認知のような病理学的な恐怖反応の 3 つに分割した成分を変化させる上で，異なった優先順位を置いてきているという。行動の変化に比較的大きな強調を置く研究もあれば，認知に，生理学に，置くものもあるという。治療処置結果の評価を導びく際に，いつもこれらの優先順位に気を配っているわけではなかったという。個人の主観的恐怖に加えて，今後の研究が，評価に対する理論に基づく多面的アプローチを取り入れることが示されているという。研究には，治療処置の結果と関連する変化について主張された原理を調査研究し，そのようなアプローチの臨床的ユーティリティを決定することが必要であると述べている。

Shechtman ら（2005）は，イスラエルの学習障害の生徒に対するセンターにいる 200 人の初等学校の生徒に提供され，認知行動療法群（CBTG）と人間性集団療法群の 2 つのタイプの集団療法（HGT）の治療処置結果とその過程を調査研究している。結果によれば，個別の学習支援に対するいずれかのタイプの集団療法を加えることで，大部分の尺度で，学習支援だけよりも有効であったという。

Weems（2005）らによると，児童期の不安障害診断分類システムの改善の必要性に経験的な調査研究は焦点を当てているという。特に，児童期の不安障害の安定性評価と重複障害の高い割合における矛盾は，現在の DSM 診断基準に関するユーティリティに疑問を挟むことになると

いう。児童期の不安障害の理解を進めるために，精神法則論的ネットモデルを利用するケースを作成しているという。児童期の不安障害診断システムを改善することに関連した尺度と評価の問題について議論し，児童期の不安の精神法則論的ネットを利用することによって，どのようにこれらの問題を記述することができるのかを示しているという。

Rapee ら(2005)は，就学前の児童の不安の進行を防ぐことを目的とする早期治療介入プログラムからの結果を報告している。その後の不安障害の最も特定される危機要因である引きこもりや抑制的行動をかなり示すのであれば，そのような児童は選択され，任意に 6 つのセッションの親教育プログラムかどんな治療介入にもなされないかのいずれかに割り当てられたという。教育プログラムは，集団に基づいており，公衆衛生適応に対する可能性を許容するのには特に簡潔であったという。親がそのような教育環境に割り当てられた児童は，親が何の治療介入も受けていない児童と比較して，12 ヶ月の不安診断でかなり大きい減少を示したという。しかしながら，抑制や引きこもりの尺度に関しては，どのような重要な効果もなかったという。結果によれば，これらの効果は気質の変更を通して調停されるようには思われないが，短時間でさえ不安障害に対する非常に早期の治療介入の価値が示されたという。

Klin ら(2005)は，アスペルガー症候群(AS)に対する 3 つの代替の定義の使用についての調査研究を行っている。3 つの疾病分類学システムにわたる相違が，診断課題，IQ のプロフィール，重複障害の兆候，社会的及びその他の精神医学的兆候の家族集団によって調べられたという。方法として，診断，知的機能，重複障害の形態，家族歴に関する基本的データが，知的障害のない自閉症あるいは高機能自閉症(HFA)，あるいは AS である可能性が高いと審査された 65 人の個人から得られたという。AS の診断は，DSM-IV，3 歳までの意思伝達的な句を用いた会話の存在あるいは欠如，AS の原型の特徴に焦点を当てるようにデザインされたシステムの 3 つの異なったアプローチがなされたという。結果として，3 つの診断システム間の一致は不十分であったという。AS は，3 つのシステムのうち 2 つにおける IQ プロフィールに基づいて，HFA と識別することができたが，特定不能の広汎性発達障害(PDD−NOS)とは識別することができなかったという。

Graham(2005)は，障害のある児童青年に対する認識行動療法(CBT)の目下および将来の状態を考察することを目的として研究を行ったという。認知行動療法の狭義のそして広義の定義が与えられ，中心となる要素が記述されているという。これらの療法の歴史的展開と様々な方面における心理療法家による受容が論じられているという。

de la Barra(2005)は，535 人のチリ人の児童の 1 年生と 6 年生を，それぞれ教師と親の質問紙を用いたテスト，再テストによって，6 年生を自己評価尺度によって評価したという。教師の評価によると，不服従と攻撃性，羞恥および多動性が持続していたという。相互の予測から，不服従と攻撃性は，情緒的な未成熟を予測する認識的，集中的な問題の危機を増加させ，多動性は，不服従と攻撃性を予測したという。

Benning ら(2005)によると，地域，大学生の男女，投獄された男性からなる 3 つの対象者か

ら，多次元的人格尺度（MPQ）から主要な特性尺度によって指標づけをされたものとして，精神病理学的人格尺度（PPI）に表現される精神病質の 2 つの明瞭な要素の評価基準の正当性を調査研究している。PPI 要因自体と一致して，MPQ で評価された PPI-I は，内在化された障害の兆候と恐怖とは否定的に関連し，スリル，冒険探知，愛想，活動，および自己愛と肯定的に関連するという。MPQ で評価された PPI-II は，社会性とは否定的に関連し，外在化された障害の兆候，衝動性，非抑制性，退屈の敏感さ，特性不安，否定的情緒性と肯定的に関連したという。

Johnson ら（2005）は，家族環境質問紙によって評価された，家族環境の認知に関する，社会不安，抑うつ状態，社会不安と抑うつ状態の重複されたものの比較群と，対照群に対する自己報告尺度を用いている。結果によれば，重複群と抑うつ群は，社会不安群と対照群よりも，他人の意見，達成を恥じる感覚，家族の親睦の制限に過度に関連するものとして，家族を評価していたという。社会不安群と対照群に関しては，社会不安群は，これらの変数それぞれにおいて，対照群よりも否定的に家族環境を評価していたという。

Panichelli-Mindel ら（2005）によると，構造化された診断面接で測定された内部の苦悩の表面化において異なった，不安障害の若者での治療処置の結果の差異が評価されたという。171 人の診療所で受診した，不安障害の児童が参加者として役目を果たしたという。参加者の主要な診断は，分離不安，全般性不安および過剰不安，社会恐怖および回避の 3 つの不安障害の一つであったという。治療処置善の評価において，児童とその親は，児童の診断を決定するために不安障害面接表（ADIS）を用いて，別々に面接を受けたという。高い苦悩の表面化あるいは低い苦悩の表面化としての児童の状態は，不安障害の親の裏書きと児童の裏書きあるいは不安障害の裏書きの欠如によってそれぞれ決定されたという。一般に，結果によれば，児童によって報告された苦悩の水準は，治療処置の結果を加減していたという。両群は治療処置の利益を得たけれども，低い苦悩が表面化した児童よりも高い苦悩が表面化した児童の方が治療処置の利得を多く体験したという。

Siqueland ら（2005）は，全般性不安障害（GAD），社会恐怖（SP），分離不安障害（SAD）の 12～18 歳の青年に対する，修正された認知行動療法（CBT）と愛着に基づく家族療法（ABFT）の組み合わせにおける予備的な効果的データを収集することと同様に，受容性と実行可能性を評価することを目的として研究を行っている。結果によれば，治療処置による重要な差異はなく，臨床的評価者と自己報告によって，不安と抑うつ状態の兆候の著しい減少が見られたという。治療処置間の重要な差異のない追跡調査の 80%と 100%の継続した改善のある CBT−ABFT での 40%と比較して，CBT の青年の 67%は治療処置後に最初の診断に対する基準をもはや満たさなかったという。CBT と CBT−BFT の両方が不安を抱えた青年に対する有望な治療処置であるように思われるが，一層の治療処置の発展と評価が必要であると述べている。

Vecchio と Kearney（2005）は，選択緘黙の 15 人の児童（SM），選択緘黙がなく不安障害の 15 人の児童（AD），不安障害も選択緘黙もない 15 人の児童（CN）によって，選択緘黙と不安障害の関係を調査研究している。4～10 歳の児童，親，教師，臨床医からデータは集められたという。

結果によれば，選択緘黙の児童は，不安障害の児童にかなり類似しているという。選択緘黙の児童すべては，社会不安障害の診断を受け，53%は，さらに別の不安障害の診断を受けており，選択緘黙群と不安障害群は親と教師に評価された内面化された行動上の問題に関する統制から実質的に異なっていたという。親と教師が報告した外面化された行動上の問題に関しては，集団間の差異は見られなかったという。結果は，選択緘黙と不安障害の関係を強調する先行研究と一致し，選択緘黙が不安に関連する問題として概念化され，評価され，治療処置をされるかも知れないと示唆している。

Siu ら(2005)は，中国人の青年の社会的問題解決を測定する手段の開発を報告しているという。社会的問題解決尺度改訂版(SPSI-R)は，中国語に翻訳され，翻訳された尺度の満足している妥当性，文化的適切性，閲読水準が専門家のパネルによって見直されたという。尺度の中国語版(C-SPSI-R)が，352 人の下級中等学校の生徒の対象者に行われたという。中国語版 Beck 抑うつ尺度得点の高得点と低得点の青年は，理性的問題解決を除く中国語版 SPSI-R の 5 つの 2 次尺度のうち 4 つにおいて，大きな違いが見られたという。全体として，中国語版 SPSI-R は，中国人の青年での社会的問題解決の評価において，信頼性のある妥当な手段であると述べている。

Norton ら(2005)は，パニック兆候，健康不安，強迫兆候，不安を含む一般的不安の脆弱性，特定不安の脆弱性および特定不安の評価の間の関係の以前に得られた階層的モデルを模写し，拡張する研究を行っている。肯定的感動性と抑うつ性と同様にこれらの変数を評価する質問紙が，パニック障害，社会不安障害，強迫性障害，全般性不安障害，大うつ病性障害に対する治療処置を求めている 125 人の外来患者に行われたという。臨床的対象を用いた結果は，学生の対象者を用いた先行研究で得られた階層的モデルとかなり一致したという。

Ingles ら(2005)によると，青年男女に対する対人関係の困難さについての質問紙の心理測定的特性を分析することを目的として研究を行っている(Ingles et al.,2000)。研究 1 では，質問紙が 4,240 人の高校生の対象者に実施されたという。調査の因子分析では，変化の 42.86%を占める 5 つの要因を確認したという。5 つの要因は，断定，異性愛の人間関係，公での話，家族関係，および緊密な友情であるという。内的一貫性は高かったという(0.90)。研究 2 では，538 人の高校生が，社会不安と人格自己報告測定に応答したという。2 週間の期間にわたって，テスト，再テストの信頼性は適切であったという(0.78)。青年男女に対する対人関係の困難さについての質問紙と発言者としての信頼性の個人的報告との間の相関関係は r=0.43，社会恐怖および不安尺度は r=0.61，Eysenck 人格尺度は r=−0.38，外向性，r=0.34 神経症であり，統計的に重要であるという。重要な差異が社会恐怖の有無により青年男女に対する対人関係の困難さについての質問紙の合計得点で見られ(d=1.53)，質問紙の構造の妥当性を支持するものであると述べている。

Bleiberg(2005)は，主要な精神分析学的な伝統の中で精神病理学に対する発達上のアプローチを概観し，子どもの発達と実証的な発達上の研究の直接的な観察に基づいて支持されるかある

いは改訂することができる精神分析学的モデルについて論じている。

La Greca ら（2005）は，抑うつ状態と社会不安の予測因子として，仲間集団の連携と仲間を犠牲にすることなどの一般的な仲間関係を含む様々な段階での青年男女の個人間の機能と最良の友情とロマンチックな関係の質について，調査研究をしている。14～19 歳の 57%が女性の 421 人の様々な民族の青年男女に対して，仲間集団連携，仲間を犠牲にすること，最良の友人関係とロマンチックな関係の質の尺度についての調査を行ったという。民族性に対するいくつかの適度な効果が見出されたという。研究結果によれば，青年男女の社会的関係の多面性が唯一内面的苦悩の感情に貢献するのが示されたという。

Silverman ら（2005）によると，過度の恐怖と不安などの内面化された障害が，児童青年の大部分で広がっているという。児童の内在化した障害に関する心理社会的治療処置についての研究は，児童の外在化された障害に関する研究に遅れをとっているけれども，児童の内在化された障害に対する経験に基づく治療介入の発達において，かなりの進歩がなされてきているという。パニック障害と不安障害の児童に用いられた心理社会的治療介入の発達と評価においてなされた進歩を要約することを目的としたという。治療上の手続きと戦略について，例えば児童，親，仲間の変化の知識の動因への転移によるエクスポージャーをセラピストがどのように促進するか，不安の効果的な治療処置の本質的な要素が，恐怖の対象や状況にどのように児童のゆるやかなエクスポージャーを含めるかを論じているという。

Beidel ら（2005）は，若年児童の社会恐怖の治療処置に関する研究について論じている。社会技術を増加させ，社会恐怖と社会的回避を減少させ，自己概念を増加させるような様々な次元にまたがる能力を表すことを目的とした児童のための社会効果療法（SET-C）と呼ばれる認知行動モデルを用いているという。治療処置の要素には，社会技術訓練，仲間の一般化，エクスポージャーが含まれるという。評価と結果尺度を詳細に記述しているという。結果によれば，児童の社会恐怖に対して SET-C が有効な治療処置であることが示されたという。同様に，6 カ月の追跡調査から，社会的達成において，顕著な改善が明らかになったという。

Kendall ら（2005）は，全般性不安障害，分離不安障害，社会恐怖の 7～17 歳の児童に対する治療処置の有効性を試験する印象的な研究プログラムを記述している。支持的な役割での親の活用と同様に，最初に併発する不安，気分，行動及び発達障害のような合併状況を含むことによって，有効性と本来の世界の研究を橋渡すために用いた努力を最近の研究が明らかにしているという。治療処置の目的は，将来の不安を管理するのを援助する技能を児童に持たせることであるという。ぶり返し防止，家族との作業，不安の治療処置に関する様々な研究結果を含む評価と治療処理方法について論じているという。治療処置の利得が 1 年以上も維持されることを示す長期間の追跡調査の結果を更に記述している。これらの記述の中で，認知行動療法も幾つかの併発する条件に有益であるとしている。

抑うつ状態にある青年男女の治療処置研究チーム（2005）によると，抑うつ状態にある青年男女治療処置研究は NIMH によって主催された多中心の任意に選択された臨床的試みであるとい

う。大うつ病性障害の青年男女に対する 4 つの治療処置，フルオキシチン，認知行動療法，その組み合わせ，および急性の錠剤偽薬の短期と長期の有効性の評価を行うために立案されたという。この報告では，実例の人口統計学的，と臨床的特性を記述し，外部的妥当性を記述しているという。関係者は，12～17 歳の現在の大うつ病性障害の主要な DSM-IV 診断基準の診断を受けた 439 人の青年男女であるという。基準となるデータは，国家的サンプルとこれまでの試みから要約され比較されるという。サンプルの構成は，54.4%が女性，73.8%が白人，12.5%がアフリカ系アメリカ人，8.9%がスペイン語系アメリカ人であるという。平均児童抑うつ評価尺度改訂版総得点は，86.0%が最初の大うつ病エピソードの経験があり，60.1（標準偏差 10.4,範囲 45～98）であったという。最も一般的な同時に起こる診断は，全般性不安障害（15.3%），注意欠損多動性障害（13.7%），反抗挑戦性障害（13.2%），社会恐怖（10.7%），および dysthymia（10.5%）であるという。人口統計学的結果は，国家的サンプルと抑うつ状態の青年男女を含む大きな精神薬理学的試みのデータと一致しているという。抑うつ状態の青年男女に対する治療処置研究では，青年男女の大うつ病性障害の複雑さを際立たせ，基準となる精神病理学と治療処置の結果に関する調節と仲介変数の効果を解明する豊富なソースを提供する抑うつ状態の青年男女の大きな，様々な代表的サンプルを提供すると述べている。

Jackson ら（2005）は，6 歳の男子の選択緘黙の治療処置に対する 2 つの成功を収めた多次元的な 5 セッションと 1 年間の追跡調査について記述している。1950 年からこれまでの選択緘黙の治療処置の実在する文献の評価的概観についても行っている。評価のアプローチには，行動的，認知的，体系的，心理力動的要素を用いたという。治療処置の有効性は，治療の相互作用の間のクライエントの行動上の時間サンプルのビデオ観察，クライエント自身の報告，親の報告，学校での行動観察を通して行われたという。結果によれば，対応のある $t(17)=2.31$，$p=0.33$ で治療セッションの間の言語行動において著しい増加が見られたという。

Ollendick ら（2005）によると，児童青年期の内在化した障害には不安障害と情緒的障害が含まれるという。それ自体，障害は心配，恐怖，羞恥，低い自尊感情，悲しみ，抑うつ状態と関連した問題から構成されるという。これらの感情的な問題は臨床的環境で相関するものであり，要素の分析的研究で，しばしば統計的に互いに関連づけられることがわかったという。内在化した問題は，しばしば不注意，悪い行為，反抗，挑戦と関連する外在化された問題と対比することができるという。児童青年期における内在化した問題と成長する児童青年に関する有害な効果の存在についてはほとんど問題がないけれども，それらの問題がひとつの広い範囲の内在化された障害を構成するか，複合的な狭い範囲の障害を構成するかかなりの論争があるという。

Tyrrell（2005）によると，学校恐怖症は初等学校と中等学校の児童生徒の 5%以上に影響を与えている重篤な障害であるという。長期間の結果には，落第，減退した仲間関係，親の衝突，付加的な精神医学的障害の進行が含まれるという。頭痛，胃痛，疲労のような共通の身体症状に隠されて，学校恐怖症は容易に診断ができないという。学校恐怖症の問題を解くことは，学校の看護婦にとって挑戦的であり，重篤な潜在的結果に関する知識の総合的な不足によって複雑

にされているという。学校恐怖症を定義し，怠学とを区別し，ますます共通で潜在的に重篤な障害の治療処置に役立つ治療介入を強調することであると述べている。

Farrell ら（2005）は，オーストラリアのブリスベーンにある地域診療所の不安のある児童生徒の認知行動治療介入 FRIENDS プログラムの有効性を調査研究している。児童青年，家族に対する革新的な調査に基づく心理学の健康調査センターでの FRIENDS プログラムを，18 人が参加し実行したという。治療介入を開始する前に，参加者は不安障害の基準を満たしている者が 11 人，不安の下位臨床症状を体験している者が 7 人であったという。治療処置の前後で，参加者は診断的面接を用いて評価され，自己報告質問紙を行ったという。結果によれば，治療介入前に不安の基準を満たしていた参加者の 73%が治療処理後に診断外になったという。

Masia-Warner ら（2005）によると，社会不安障害は発症のピークが青年期にあるが，重大な損傷と関連するという。有効な治療処置の妥当性があるにもかかわらず，ほとんど影響を受けている若者は，サービスを受けていないという。学校への治療介入の移行は，治療処置の障碍の抜け道を考え出すかも知れないという。社会不安障害に対する画工を基盤とする治療処置の有効性が，26 人が女性の 35 人の青年男女の任意の待機リストの統制された試みで調査研究がなされたという。評価者とは独立し，治療条件に対しては隠され，治療介入の前後及び 9 ヶ月後に参加者の評価がなされたという。全体的な機能がかなり改善されたのと同様に，社会不安と逃避での統制群よりも，治療介入群の青年男女は，かなり大きな回復が見られたという。更に，治療対象者の 67%は，待機リストの参加者の 6%と比較すると，治療処置に続く社会恐怖の基準をもはや満たしていなかったという。研究結果から，学校を基盤とする治療介入の可能な効果が社会的に不安な青年男女の治療処理に対する促進される試みを支持するものであると述べている。

Oland と Shaw（2005）によると，併発する内在化障害と外在化障害は，児童，青年，成人にかなり広がっているが（Anderson ら（1987），McConaughy ら（1994）），なぜ，内在化する徴候と外在化する徴候が，ある児童では別々に起こり，ある児童では同時に起こるのかについて理解することが依然として残っているという。以前には考えられていなかった可能な影響は，ある児童には同時に起こる症状の進行を逆説的に防止する社会発達的な里程標を得ることができていないということであるという。

Greco ら（2005）によると，受容と委任の理論（acceptance and commitment therapy）の有効性と関連するアプローチが広い範囲の成人の臨床的障害にわたって経験的に示されてきているという。受容と変化に対する価値と理想的方法論は，児童青年の行動理論の領域内では，依然として事実上展開されていないという。児童の不安の本質を論じ，不安あるの若者の存在する認知行動療法理論プロトコールの幾つかの主要な要素を要約しているという。児童の不安に対して関係枠組理論（Relational Frame Theory）の基本原理を適用し，児童期の不安障害での認知的融合と経験的統制の二つの関係枠組み理論に関わる過程の潜在的役割を記述し，受容と委任の理論の幾つかの中心的な要素を概観しているという。若い人々に対するこのアプローチの適用に対する

示唆を提供し，将来の臨床的経験的作業に対する方向性を与えているという。

Levitt と Karekla（2005）によると，パニック障害に苦しめられている人々で，機能的損傷をパニック障害が引き起こしているということは一般的に認識されているという。パニック障害の診断は，失われる生産力や増加する健康ケア利用のような個別にも社会的にも膨大な費用に関連するという。パニック障害の有効な治療処置がかなり医療費用相殺を生み出し，人生の質における意味のある改善を生じるということが最近の研究で示されているという。

Bhatia と Sapra（2005）によると，成人期のヒステリック障害と比較して，児童期のヒステリーは当然の認識と一致してはいないという。てんかん発作は，行動において，てんかん性捕獲に類似しているが，器質的原因のない発作発射であるという。児童におけるてんかん発作に関する文献はほとんどないという。2 年間の研究において，てんかん発作の 50 人の児童について報告されているという。14 人の患者（28%）が，親類や級友で発作を見たという履歴があったという。学校恐怖症と試験に対する恐怖は，最も一般的な促進された要素であったという。分離不安障害，学校恐怖症，気分性障害が，共通の合併診断であったという。患者に対して，3 ヶ月間の適切な薬物治療と精神療法がなされたという。50 のケースのうち，36 件（72.0%）は軽減され，10 件（20.0%）はてんかん性発作の頻度が減少を示し，4 件（8.0%）は向上しなかったという。正しい診療と治療処置によって，てんかん性発作の児童では良い結果になったという。

Target ら（2005）は，児童の治療法上作用する支配的なアプローチ，心理力動，遊戯療法，認知療法，家族療法を記述し，概観している。これらの方法の考慮に入る前に，すべての児童の心理社会的療法は，成熟過程に関する関係，支持するか妨げる社会的枠組みに適合させられる必要があると強調されているという。

Al-Sahel（2005）は，クウェートの小学校での低達成の問題についての教師の認識に焦点を当てている。520 人の小学校の教師が参加したという。学校での低達成の問題の背後にある主な理由は，家族要因に因るものであると教師は考えているという。学校での低達成に対する最も関連する問題は，読み取りの困難さ，不十分な書き取り，宿題を怠けること，白昼夢であることが示されたという。教師は，低達成の生徒を更に高い達成にすることができると考えていたという。教師の低達成の認識と比較すると，男性教師と女性教師の間にはどんな重要な差異もないということであったという。

Goldstein（2005）によると，小児科での双極性障害と関連づけられる高い病的状態を示す証拠にもかかわらず，これらの人々の中で自殺的行動の広がりと臨床的関連についてはほとんど知られていないという。双極性障害の児童青年の間での自殺的行動の広がりを調査研究し，人口統計学的，臨床的，家族的危険因子について，双極性障害のない対象者と比較することを目的としているという。対象者は，405 人の年齢 7～17 歳の児童青年であり，双曲 I 型障害（236 人）と双曲 II 型障害（29 人）の DSM−IV 基準を満たしているか，学齢児の情緒障害と統合失調症尺度により特定不能の双極性障害（140 人）の対象者であるという。双極性障害の若者の経過と結果の小児科の双極性障害の多面的縦断的研究の一部として，人口統計学的，臨床的，家族歴の変

数が対象者と保護者，後見人の臨床的面接を通して初回に行われたという。双極性障害の患者のおよそ 1/3 に自殺企図の履歴があったという。自殺を試みた者は，試みない者と比較すると，比較的年齢が高く，混合性エピソードの履歴，精神異常の特徴，双曲 I 型障害である傾向があったという。自殺を試みた者は，合併症としての物質使用障害，パニック障害，非自殺性自傷行動，自殺を試みた家族歴，入院歴，身体的虐待，性的虐待の履歴のある傾向があったという。これらの結果から，双極性障害の児童青年は，高い割合の自殺的行動を示し，双極性障害と合併症の更に重篤な特徴と自殺的試みの危機を増加させていることが示されたという。多面的臨床要因は，自殺を試みる者との識別が現れたという。

Marchesi ら（2005）によると，薬物療法前後 1 年間に治療処置後に人格的特性が変化するかを確かめるために，人格障害がパニック障害の患者で評価されたという。人格障害の患者では，症状の改善はパラノイア，逃避，依存特性の減少と関連し，パラノイアの特性の正常化と逃避と依存特性の持続と関連づけられたという。データによると，人格障害の患者では，パラノイア特性ばかりではなく，逃避と依存特性も，少なくとも部分的には，定まった現象が示されたという。

David ら（2005）は，合理的情緒的行動療法，基本的な理論的枠組み，適応，今後の方向性に関する概観をしている。合理的情緒的行動療法の基本的調査研究についてはじめに論じられる。効力と有効性の面，合理的情緒的行動療法が最も効果的に作用する障害の識別，他の療法とその関係を含む合理的情緒的行動療法における臨床的，適用された研究が示されているという。有効な認識行動心理療法は効力と有効性の必要な規格には達していないけれども，それでもおよそ 30～40%の人々がこれらの治療介入に対しては反応しないという。合理的情緒的行動療法は，精神病理学と人間の機能の認識行動上のモデルの理論と効力と有効性に関する実証的研究を生き返らせるプラットホームかもしれないと述べている。

Wiederhold ら（2005）は，バーチャルリアリティ（VR）の不安障害の治療処置への適用性に関する情報を提供することを主な目的として研究を行っている。VR が何であり，どのような形態の技術にかかわり，臨床的実践にどのように適用されるかを説明しているという。特定の不安障害のそれぞれに対して，治療処置の過程の各段階を通してセラピストを導くように立案された実践的実用的戦略と治療介入を記述しているという。不安障害を治療するための VR の概観と臨床的適用から始めているという。技術としての VR について説明，不安障害の治療処置に VR をどのように実行するかを臨床医が理解するための手引き，特定の不安障害の治療処置の記述を行っている。簡潔な序論の後，一般化された障害から，より特定の恐怖症までを取り上げているという。将来の治療的 VR 適応の見通しについて述べている。

Kamphaus ら（2005）によると，心理学的なサービスを求める要求が増加し続けるに従って，個性と行動の評価が主要な活動であり続けるという。児童青年と関わるとき，心理学的評価は，さらに大きな挑戦を示することができるという。第 2 版では，現代の評価実践に必要な心理学的知識の基本に関する関係の中で，児童青年の個性と行動の歓迎されタイムリーな概観を提供

しているという。

4　school refusal に関する文献

2005 年の school refusal をキーワードに持つ文献 121 件のうち，関連の考えられる 26 件を取り上げる。国別では，アメリカ合衆国が 14 件，英国が 2 件，スウェーデンが 1 件，ナイジェリアが 1 件，イタリアが 2 件，オーストラリアが 3 件，ナイジェリアが 1 件，オランダが 1 件，スペインが 1 件である。

McCune ら（2005）は，成人の生活での登校拒否（学校恐怖症）の結果についての評価を行うことを目的として研究を行っている。10 年間の追跡調査が，若い成人と親の対象群によって行われた質問紙と親による電話面接によって行われたという。比較群についての同様に行われたという。精神医学的障害が 30%に存在し，事例性は 20%以上であったという。結論として，児童期の障害で長期的に継続する有効性のある治療介入を特定することが必要であると述べている。

Ostberg ら（2005）は，治療介入に焦点化された児童の問題は，子育てに関わるストレスを減少させるかどうかを調査研究している。子どもの睡眠や食事についての問題に対して専門児童健康センターに援助を求めている 33 人の母親が，診療との接触のない同じ性別と年齢の子どものある 66 人の母親と比較されたという。2 群は，治療介入の係わりを開始する前に，ストレスの等しい水準になると考えられたという。治療介入との係わりのない母親よりも，治療介入を受けた母親は適格性を増加させ，親の責任によって制限される経験を減少し，治療介入後の結婚関係に対する満足を増加させたという。子どもに関連する問題は，治療介入群でかなり減少したという。結論として，子どもの睡眠や食事についての問題のような毎日の問題を切り抜けるのを援助する早期の治療介入の重要性を支持していると述べている。

Gesinde（2005）は，ナイジェリア Oyo 州での中等学校生の怠学的行動に対する，子ども，家族，学校，社会，および政府の要因の個別あるいは結合された貢献を調査研究を行っている。540 人の生徒が，Oyo 州の 3 つの上院議員区から，多段階で目的的標本抽出技術によって選出されたという。4 つの有効な手段が，対象者からデータを集めるのに用いられたという。多重回帰分析と t-検定の統計値がデータ分析に用いられたという。研究結果によると，すべての独立変数が，依存変数とかなり互いに関連していることが示されたという。怠学的行動で観測された変化の 66.0%を 5 つの独立変数が，関連して評価していることが明らかになったという。

Tyrrell（2005）によると，学校恐怖症は，初等学校と中等学校の児童の最大 5%の初等学校，中等学校の児童に影響を与える重篤な障害であるという。長期間にわたる結果には，落第，仲間関係の減少，親との衝突，付加的な精神医学的障害の進行が含まれるという。頭痛，胃痛，疲労のような共通の身体的兆候の背後に隠れて，学校恐怖症は容易に診断ができないようにしているという。学校恐怖症の問題を解くのは学校の看護婦にとって挑戦的であり，重大な潜在的結果に関する知識の総合的な不足によって複雑にされているという。

Muratori と Picchi（2005）によると，疫学的研究から，不安障害は幼児期と小児期で最も一般的な問題であることが示されたという。臨床的描写は，特定の障害，発達段階および合併症に

従って異なるという。横断的研究と縦断的研究では，不安障害が，一度考えられるよりも，柔順ではあるが持続的障害であると指摘されているという。多くの研究から，行動上の治療処置の短期的効力が見出されたという。いくつかの研究から時間が経つにつれて長期間の効果が示され，ある研究から特定の問題が対象とされる簡潔な児童心理療法に結果がより良くなるということを支持する傾向があったという。児童の臨床的必要性に対するより大きい治療法の精度と治療処置の慎重な彫刻が，医学的サービスで広く用いられている心理力動的精神療法に必要であるという。臨床的自然主義的な設定にある児童に対する時間を限定して結合した個々の親に焦点を合わせた心理力動的精神療法の記述の後に，短期と長期の有効性を評価する研究プロジェクトが示されているという。不安障害の有効な治療手段として心理力動的精神療法が臨床的に広く適用されているが，慎重で長期的な結果評価についての研究はほとんどなされていないという。結合した心理力動的精神療法による親の徹底的なかかわり合いの役割が，このタイプの治療処置に対する特定の研究領域として提案されている。

Eisen と Schaefer（2005）は，登校拒否行動と典型的な分離関連の恐怖を区別して，分離不安の本質の探究から始めている。対処技術訓練，認知行動療法治療介入，ぶり返し予防，効能促進セッションを通して，初回と評価からから，セラピーの全過程を管理するために，包括的な治療処置モデルを概観し段階的な指針を提供しているという。5 つの包括的な事例では，昼夜の多面的状況と家庭，教育課程外，学校，キャンプの環境を通して，3〜17 歳の対象者の複雑さを記述している。子どもと親の強い絆を創り，様々な子育てスタイル，家族のストレス，併発する問題，発達規制，その他の治療上の挑戦を取り扱う上での本質的な洞察についても示されているという。限られた認知行動療法体験のある人々を含むあらゆる背景の臨床医のため，最大の有用性に対して立案されているという。

Weiskop ら（2005）によると，発達障害の児童に対する睡眠治療介入の良く統制された刊行された評価はほとんどないという。自閉症や虚弱 X 症候群（FXS）の児童の睡眠上の問題を減少させる行動原理を用いた親の訓練プログラムを評価しているという。訓練には，就寝時刻手順，強化，有効な指示，パートナーサポート，行動を抑制する強化を取り除く消去が含まれているという。プログラムの効果は，関係者にわたる多重基線デザインを用いることによって示されているという。社会的妥当性も評価されたという。4 人の男子と 2 人の女子で平均年齢は 5 歳 6 ヶ月，3 歳 5 ヶ月から 7 歳 4 ヶ月の自閉症の 5 人の子どもとアスペルガー症候群の 1 人とその親，6 人の男子と 1 人の女子，平均年齢 4 歳 9 ヶ月，1 歳 11 ヶ月から 9 歳 1 ヶ月の 7 人の FXS の 7 人の児童と親が参加したという。多重基線デザインの治療介入を 10 家族が実行したという。ほとんどの親の目標は達成され，睡眠データの視覚分析は改善が示された。問題を安定させること，夜間の覚醒，一緒に寝ることは，有効に抑制されたという。

Cotter ら（2005）によると，損失は縦断的データを収集している研究者に重大な問題を提示するという。関与している損失は，研究結果の内的外的妥当性を脅かすという。縦断的研究における接触困難と拒否に関連する予測因子を調べようとしている。データは，177 人の診療所で

診断された男子の対象者における破壊的行動障害の進行を調査研究する縦断的研究，発達傾向研究から得られたという。11 歳～19 歳の毎年の追跡調査の評価が行われたという。プロジェクトの 1～4 年間の間，予測因子には，人口統計学，児童の機能，親の機能，子育て技能，関与している分散が含まれていたという。参加者の比較的高い年齢，低い社会経済的状態，無情で非情緒的行動の存在，反社会性パーソナリティ障害の父親がいることが接触困難を予測し，参加者の比較的高い年齢，田舎の環境で生活し，注意欠陥多動性障害が拒否の予測となるという。関与している分散は，接触困難か拒否状態のいずれに関連するかはあまり重要ではなかったという。

Kennard ら（2005）は，抑うつ状態の青年に対する治療処置研究（TADS）の試みにおいて，認知行動療法のセラピストが頻繁に遭遇する治療処置の障碍を論じている。障碍は，(1) 不安，行為，注意上の問題，学習障害のような併発する障害，(2) 快楽喪失や希望のなさのような重篤な抑うつ症状，(3) 自己害と自殺念慮，(4) 登校拒否，(5) 個人間の要素，(6) 治療処置を遵守しないことの 6 つに分類されたという。事例の描写では，これらの治療処置の障碍と治療処置マニュアルの中でどのように記述されたのかを例証するために提供されているという。

Gadow ら（2005）は，広汎性発達障害，臨床的統制群，地域社会を基盤とする対象者の 6～12 歳の児童での DSM−Ⅳ症状を比較している。親と教師は 4 つの対象者に対して，児童症状調査第 4 版を行ったという。広汎性発達障害（284/284）と広汎性発達障害ではない臨床的対象者（189/181），通常学級の生徒（385/404），特別支援学級の生徒（61/60）が対象者であったという。広汎性発達障害群は，通常学級群よりも高い症状重篤率であり，広汎性発達障害ではない臨床的対象者と同様であったという。出現率は，ADHD，反抗挑戦性障害，全般性不安障害に対して高かったという。広汎性発達障害のサブタイプは，精神医学的症状の特異的に高い割合を示したという。症状重篤率の割合の程度と性差はあまり大きくはなかったという。広汎性発達障害の臨床的対象者は，広汎性発達障害ではない臨床的対象者と精神医学的症状の形態で，高い類似性を示したという。多くの付加的な調査研究が合併症に関して必要ではあるけれども，これらの症状は重要な治療処置の関係を示しているという。

Silverman と Ollendick（2005）は，児童生徒の不安と障害を評価するのに用いられる証拠に基づく方法と手段について，この分野が因って立つところの概観をしている。網羅した方法には，診断面接スケジュール，格付け尺度，観察，自己聴取形式を含んでいるという。評価の主な目的，目標について論じ，これらの目標を達成するためにはどの方法と手段に最も多くの証拠があるのかを示しているという。分野が証拠に基づく評価アプローチに向かって動くように続けられた研究の注意を必要とするいくつかの特定の問題に焦点を合わせているという。

Borbely ら（2005）は，青年男女の闘争解決効力と社会的技術との関係を調査研究するのに 450 人のニューヨーク市の 6 年生の闘争解決ロールプレーの小文と自己報告調査を用いたという。小文には，3 つの社会的関係，活動上の不一致の仲間との闘争，小遣いを上げるような親との闘争，レポートの低い評価のような教師との闘争が含まれているという。これらの闘争を解決

するための効果のある戦略と効果のない戦略は，録画された相互作用からコード化されたという。親との闘争よりも，仲間との闘争を解決することは，有効であったという（xsup2（1）=7.10,p<.01）。強いコミュニケーション技術は，有効な解決と関連づけられる個人間の関係と関わっていたという。断定と攻撃性の欠如は，仲間との小文での効果的な闘争解決に関連が見られた。断定は親との小文での有効な闘争解決にも関連が見られたが，気後れは親との小文の形では，闘争解決を容易にすることが不意にわかったという。特定の関係の中で観察された技術だけが，その関係における有効な解決と関連づけられたという。自己報告技術と交差している関係の観察された技術は効力とは関連づけられなかったという。

Pini ら（2005）によると，パニック障害（PD），大うつ病性障害（MDD）の患者，健康な個人の統制群（HD）と比較すると，双極性障害（BD）の患者群において，児童期の分離不安障害（CSAD）と成人の分離不安障害（ASAD）の DSM−Ⅳ診断の頻度と同様に，分離不安（SA）症状の頻度と重篤性を評価している。これらのことは，最初の研究であり，その他の不安障害や気分障害の対象者と比較して，双極性障害の患者の対象者の児童期及び成人期の間の分離不安症状の頻度と重篤性を展開したものであるという。分離不安が双極性障害の成人での大きな認識を受けるに値する一層の可能性を調査研究する予備的な基盤となるかも知れないと述べている。

Scott ら（2005）によると，不安障害の児童青年に対する幾つかの治療処置は有効であるけれども，これらの治療処理の有効性について比較をしている文献で，よく統制された研究はほとんどないという。不安障害の児童青年の統制された治療処置研究の概観をすることを目的に研究を行ったという。児童青年の不安障害の統制された治療処置研究の調査研究の文献を PsycINFO と Medline を通して体系的に概観をしたという。治療処置形態の有効性が比較されていない研究は除外したという。結論は，不安障害の多くに対して，特に認知行動療法と薬物療法について有望であったが，対象が小規模であったり，集団と一般化での合併症の記載がなされていなかったりしていたという。児童青年の不安障害の治療処置においては長足の進歩であるが，経験に基づく研究では定量的な限界があるという。

Hayes と Kameguchi（2005）によると，日本は過去 40 年間で巨大な社会的な変化を経験したという。三世代家族がほぼ消滅し，核家族が出現，都市化の激化，従業員での女性と移民の参加の増加である。これらの変化には，日本人の若者の中の伝統的な日本の家族構造の浸食，離婚率の上昇，犯罪および暴力の上昇，特に中年男性の間の自殺の流行病が伴われたという。一連の精神健康の関心を記述する際に，カウンセリングと精神療法の比較的広い社会的承認によって奨励され，日本の家族カウンセラーは，サービスの需要のかなりの増加が見られることが期待されるものであると述べている。

Kubiszyn ら（2005）は，抑うつ状態，強迫性障害，強迫性障害以外の不安の前思春期の内在化した障害に対する証拠に基づく薬物の研究，心理社会的で結合された治療処置を概観している。年齢の効果はなかったという。どんな結合した研究も証拠に基づく基準を満たさなかったが，薬物治療処置に関する安全の関係によって，効果を生じている，あるいはおそらく効果を

生じる心理社会的薬理学的治療処置が特定されたという。

Dudley ら（2005）によると，新しい手段，青年抑うつ治療処置満足質問紙（ADTSQ）が抑うつ状態の青年男女と親の消費者満足を測定するために工夫されたという。ADTSQ の心理測定的特性を取り上げ，青年期の抑うつ状態の治療処置に対して，認識行動療法（CBT），セルトラリン（SRT），認知行動療法とセルトラリンを併用した治療処置（COMBINED）に対する相対的消費者満足を調査研究しているという。高いレベルの消費者満足は，3 つの治療処置を受けた青年男女と親によって報告されたという。認知行動療法治療処置を受けた者は，SRT の治療処置を受けた者よりも高いレベルの技能獲得を報告したという。4 つの治療処置では，最初の好みとして，ほとんどの親と青年男女が個別のカウンセリングを評価したという。ADTSQ は抑うつ状態の青年男女と親に関する消費者満足の有用な尺度であるという。CBT，SRT および COMBINED は，参加者の報告書に反映される CBT の比較的高い技能訓練内容によって，高い消費者満足が得られたことが示されたという。個別のカウンセリングは，青年期の抑うつ状態に対する治療処置の最も好都合な選択として認識されたという。

Pakenham ら（2005）は，アスペルガー症候群の診断を受けた子どもをケアする母親の調整について説明する際に家族調整の二重 ABCX モデルの適用性を調査研究している。子どもが不安治療介入に参加している間に，47 人の母親は，大学の診療所で質問紙を回答したという。子どもは 10〜12 歳であったという。相関関係の結果によると，問題に焦点化した対処を除いて，それぞれのモデルの要素が予測される方向性で母親の調整の 1 つ以上の領域に関連するのが示されたという。

Gesinde（2005）は，school refusal にも関連するが，school attendance で取り上げる。

Hale ら（2005）は，一般の人々の青年男女の大きい対象者から情緒障害に関する児童不安尺度（SCARED）の心理測定的特性を調査研究している。2001 年に，オランダの 1,340 人の中学生と高校生の青年男女は SCARED を完成したという。SCARED は 5 つの児童青年期の不安兆候の次元を測定することを意味する質問紙であるという。SCARED の要素構造は男性と女性，早期（10〜13 歳），中央（14〜18 歳）の青年集団，オランダ人と少数民族に対して構成された確証的因子分析によって調査されたという。変化の分析は，様々な集団に対して平均点を比較することで実行されたという。

Kearney（2005）によると，臨床児童心理学者であることの大きな利益は，人間の領域で，若々しい行動についての領域に関する研究を行い，見直す機会であるという。恐らく，どんな行動も人間の存在にとって，社会的行動とその不足ほど主要でないという。子どもの人生の発達と質に重要な行動での根本的な作業を調べる機会を持つこととなったという。社会不安と社会恐怖の若者に対する主要な歴史的な局面，特性，評価戦略，心理学的治療処置技術を取り上げているという。一般には，社会不安と社会恐怖の若者についてのより良い知識を獲得することを願う人々のために作成されているという。

Moschini（2005）は，抵抗があったり，難しいクライアントに直面している時にフラストレー

ションを感じるすべてを意図しているという。1 つの答えが芸術療法であるという。芸術の力と難しいクライアントとの使用を臨床医に紹介しているという。精神療法の基礎を形成する理論上の構造,評価と治療処置に対する実際的な解決,病歴の概観に焦点を合わせているという。訓練や経験にもかかわらず，言葉のセラピーが失敗し，何年間も建物で覆われる壁を見抜くのを許容するときの方向性を提供しようとしている。

Ingles ら（2005）は，school refusal にも関連するが，school attendance で取り上げる。

Walker ら（2005）は，school refusal にも関連するが，school attendance で取り上げる。

Silverman ら（2005）は，school refusal にも関連するが，school phobia において取り上げる。

Jackson ら（2005）は，school refusal にも関連するが，school phobia で取り上げる。

Ollendick ら（2005）は，school refusal にも関連するが，school phobia で取り上げる。

Ⅲ　おわりに

2005 年の PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS における不登校に関連すると考えられる研究では,単行本の形で出版され，その中での章が文献として取り上げられているものがいくつか見られる。特別支援教育で取り上げられている障害に関わる文献が増加してきている。不安障害，社会恐怖，行為障害などに関する文献が多く見られているのが，これらの重複障害についても取り上げられているのが今年も特徴としてあげられる。

インターネットデータベースの活用の進行に伴い，引用文献，参考文献をあわせて掲載する文献が多くなったことである。文献を電子データとして保存をすることが普通となったこともあり，それぞれのキーワードに関わる文献数が著しく増加したことも特徴である。

2005 年の DIALOG データベースでの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS では, school attendance に関する文献が 372 件，school dropouts に関する文献が 190 件，school phobia に関する文献が 252 件, school refusal に関する文献は 121 件であった。2005 年の検索文献総数は 935 件であり，このうち 139 件について取り上げた。検索文献件数は，1997 年 101 件，1998 年 95 件，1999 年 118 件，2000 年 166 件，2001 年 289 件，2002 年 280 件，2003 年 371 件，2004 年 833 件であり，2004 年ほどの増加ではないが，昨年より 102 件増加している。各キーワード毎の経年変化については，そろそろまとめなければならないと考えている。増減については今後も注目しておきたい。

基礎研究としての ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献を用いた世界の不登校に関する研究の 1 年毎の概観は，15 年目となる。2002 年まで進めてきた ERIC の年毎の概観が，2003 年から検索形態が変更されたためできなくなったことは残念であるが，PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の年毎の検索が可能であるので，基礎研究を継続する。日本における登校に関連する問題，不登校に関連する問題は解決してきているとは考えられず，今後も 2000 年代の 1 年毎の概観のアプローチをしていく必要があると考える。

文献

Adamo, Simonetta M. G.et al. ：The Chance Project: Complex interventions with adolescent school drop-outs in Naples.,Psychodynamic Practice: Individuals, Groups and Organisations, **11**（3）,239-254, Aug , 2005.

Al-Sahel, Rashed Ali ：Teachers' Perceptions of Underachievement in Elementary Schools in Kuwait.,School Psychology International , **26**（4）, 478-493, Oct, 2005.

Anderson, Gabrielle E.et al. ：Student Ratings of Stressful Experiences at Home and School: Loss of a Parent and Grade Retention as Superlative Stressors.,Journal of Applied School Psychology, **21**（1）, 1-20, 2005.

Appleyard, Karen et al. ：When more is not better: The role of cumulative risk in child behavior outcomes.,Journal of Child Psychology and Psychiatry, **46**（3）, 235-245 , Mar , 2005.

Bailey, Rahn K.;Owens, Dion L. ：Overcoming Challenges in the Diagnosis and Treatment of Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder in African Americans., Journal of the National Medical Association ,**97**（10,Suppl）, S5-S10 , Oct , 2005.

Bailey, Rahn K. ：Diagnosis and Treatment of Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder（ADHD）in African-American and Hispanic Patients.,Journal of the National Medical Association,**97**（10,Suppl）, 3S-4S ,Oct , 2005.

Barrett, Anne E.; Turner, R. Jay ：Family Structure and Mental Health: The Mediating Effects of Socioeconomic Status, Family Process, and Social Stress., Journal of Health and Social Behavior, **46**（2）, 156-169 , Jun , 2005.

Beekhoven, Sandra ; Dekkers, Hetty ：Early School Leaving in the Lower Vocational Track: Triangulation of Qualitative and Quantitative Data.,Adolescence,**40**（157）, 197-213, Spr, 2005.

Beidel, Deborah C.et al. ：Treating Childhood Social Phobia: Social Effectiveness Therapy for Children., Hibbs, Euthymia D. et al.（Ed）, Psychosocial treatments for child and adolescent disorders: Empirically based strategies for clinical practice（2nd ed.）.,75-96 , xv , 839 , 2005.

Bhatia, Manjeet S.; Sapra, Savita ：Pseudoseizures in Children: A Profile of 50 Cases., Clinical Pediatrics , **44**（7）, 617-621, Sep, 2005.

Biederman, Joseph et al. ：Patterns of Comorbidity in Panic Disorder and Major Depression: Findings From a Nonreferred Sample., Depression & Anxiety , **21**（2）, 55-60 , 2005.

Blanchett, Wanda J.et al. ：Urban School Failure and Disproportionality in a Post-Brown Era: Benign Neglect of the Constitutional Rights of Students of Color., Remedial and Special Education ,**26**（2）, 70-81 , Mar-Apr , 2005.

Bleiberg, Efrain ：The Psychoanalytic Understanding of Mental Disorders: The Developmental Perspective., Person, Ethel S.et al.（Ed）,The American psychiatric publishing textbook of psychoanalysis., 173-186 , xviii , 602 , 2005.

Borbely, Christina J.et al. : Sixth Graders' Conflict Resolution in Role Plays with a Peer, Parent, and Teacher., Journal of Youth and Adolescence, **34**（4）, 279-291 , Aug , 2005

Bornstein, Robert F. : The dependent patient: A practitioner's guide.,xiv , 243 , 2005.

Brown, Duane; Trusty, Jerry : School counselors, comprehensive school counseling programs, and academic achievement: Are school counselors promising more than they can deliver?, Professional School Counseling, **9**（1）, 1-8, Oct , 2005.

Bussing, Regina et al. : Use and Persistence of Pharmacotherapy for Elementary School Students with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder.,Journal of Child and Adolescent Psychopharmacology, **15**（1）, 78-87 , Feb , 2005.

Buxton, Cory A. : Creating a Culture of Academic Success in an Urban Science and Math Magnet High School.,Science Education, **89**（3）, 392-417 , May , 2005.

Calhoon, Mary Beth : Effects of a Peer-Mediated Phonological Skill and Reading Comprehension Program on Reading Skill Acquisition for Middle School Students with Reading Disabilities., Journal of Learning Disabilities ,**38**（5）, 424-433 , Sep-Oct , 2005.

Campbell, David ; Wright, Joan : Rethinking Welfare School-Attendance Policies.,Social Service Review , **79**（1）, 2-28 , Mar, 2005.

Cho, Hyunsan et al. : Evaluation of a High School Peer Group Intervention for At-Risk Youth., Journal of Abnormal Child Psychology, **33**（3）, 363-374, Jun, 2005.

Christle, Christine A. et al. : Breaking the School to Prison Pipeline: Identifying School Risk and Protective Factors for Youth Delinquency.,Exceptionality,**13**（2）, 69-88 , 2005.

Cotter, Robert B. et al. : Predictors of contact difficulty and refusal in a longitudinal study., Criminal Behaviour and Mental Health, **15**（2）, 126-137, 2005.

Crosnoe, Robert et al., : Immigration from Mexico, school composition, and adolescent functioning.,Sociological Perspectives, **48**（1）, 1-24 , Spr , 2005.

Cullen-Powell, Lesley et al. : The Self-Discovery Programme for children with special educational needs in mainstream primary and secondary schools: An exploratory study.,Emotional & Behavioural Difficulties , **10**（3）, 189-201 , Sep , 2005.

Darling, Nancy et al. : Participation in School-Based Extracurricular Activities and Adolescent Adjustment.,Journal of Leisure Research , **37**（1）, 51-76,2005.

David, Daniel et al. : A synopsis of rational-emotive behavior therapy（REBT）; Fundamental and applied research.,Journal of Rational-Emotive & Cognitive Behavior Therapy, **23**（3）,175-221, Fal , 2005.

Davis, Thompson E.; Ollendick, Thomas H. : Empirically Supported Treatments for Specific Phobia in Children: Do Efficacious Treatments Address the Components of a Phobic Response?,Clinical Psychology: Science & Practice, **12**（2）,144-160, Sum , 2005

de Bruyn, Eddy H. : Role strain, engagement and academic achievement in early adolescence., Educational Studies, **31**(1), 15-27, Mar , 2005.

de la Barra, Flora et al. : Prediction of Behavioral Problems in Chilean Schoolchildren.,Child Psychiatry & Human Development, **35**(3), 227-243, Spr , 2005.

Dew, Sarah E.; Bickman, Leonard : Client Expectancies About Therapy.,Mental Health Services Research,**7**(1), 21-33 , Mar , 2005.

Diamond, Karen E. : Understanding Intervention Outcomes.,Journal of Early Intervention, **27**(2), 83-86, Win, 2005.

Drapela, Laurie A. : Does dropping out of high school cause deviant behavior? An analysis of the National Education Longitudinal Study.,Deviant Behavior, **26**(1), 47-62 , Jan-Feb , 2005

Dudley, Amanda L.et al. : Investigation of consumer satisfaction with cognitive-behaviour therapy and sertraline in the treatment of adolescent depression.,Australian and New Zealand Journal of Psychiatry, **39**(6), 500-506, Jun, 2005.

Dumas, Jean E. : Mindfulness-based parent training: Strategies to lessen the grip of automaticity in families with disruptive children.,Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, **34**(4), 779-791 , Dec , 2005.

Edmunds, Sarah et al. : Child Health Assessment at School Entry（CHASE）project: Evaluation in 10 London primary schools., Child: Care, Health and Development, **31**(2),143-154, Mar, 2005.

Eisen, Andrew R.; Schaefer, Charles E. : Separation anxiety in children and adolescents: An individualized approach to assessment and treatment.,xxii, 298, 2005.

Entwisle, Doris R.et al. : Urban Teenagers: Work and Dropout.,Youth & Society, **37**(1), 3-32, Sep , 2005.

Etkin, Amit et al. : Toward a Neurobiology of Psychotherapy: Basic Science and Clinical Applications.,Journal of Neuropsychiatry & Clinical Neurosciences,**17**(2),145-158, Spr, 2005.

Evans, Steven W.（Ed）: Introduction to special issue on school-based treatment of children and adolescents with ADHD.,Journal of Attention Disorders , **9**(1), 245-247 , Aug , 2005.

Farrell, Lara J.et al. : Community trial of an evidence-based anxiety intervention for children and adolescents（the FRIENDS program）: A pilot study.,Behaviour Change, **22**(4),236-248, 2005.

Fernandez, Concepcion et al. : Characteristics and one-year follow-up of primary care patients with health anxiety., Primary Care & Community Psychiatry The international journal for the management and treatment of mental health problems in primary care and the community, **10**(3), 81-93, 2005.

Finn, Jeremy D.et al. : Small Classes in the Early Grades, Academic Achievement, and Graduating From High School.,Journal of Educational Psychology, **97**(2), 214-223, May, 2005.

Flay, Brian R.; Collins, Linda M. ：Historical Review of School-Based Randomized Trials for Evaluating Problem Behavior Prevention Programs.,Annals of the American Academy of Political and Social Science , **599** , 115-146 , May , 2005.

Gadow, Kenneth D.et al. ：Comparison of DSM-IV symptoms in elementary school-age children with PDD versus clinic and community samples., Autism , **9**（4）, 392-415, Oct, 2005.

Gesinde, Abiodun M. ：Psycho-Social Determinants of Truant Behaviour Among Secondary School Students.,IFE Psychologia: An International Journal, **13**（1）, 188-199, 2005.

Goldstein, Tina R.et al. ：History of suicide attempts in pediatric bipolar disorder: Factors associated with increased risk.,Bipolar Disorders, **7**（6）,525-535, Dec, 2005.

Graham, Philip ：Jack Tizard Lecture: Cognitive Behaviour Therapies for Children: Passing Fashion or Here to Stay?,Child & Adolescent Mental Health, **10**（2）, 57-62, May , 2005.

Greco, Laurie A.et al. ：Integrating Acceptance and Mindfulness into Treatments for Child and Adolescent Anxiety Disorders: Acceptance and Commitment Therapy as an Example.,Orsillo, Susan M.et al.（Ed）,Acceptance and mindfulness-based approaches to anxiety: Conceptualization and treatment.,301-322 , xvii , 375 , 2005.

Greenfield, Derek ：Learning is more affective than cognitive: Using the relationship-based, interactive classroom to promote student retention and success.,Manalo, Emmanuel et al（Ed）, Communication skills in university education: The international dimension.,88-114,x,276, 2005.

Greig, Anne; MacKay, Tommy ：Asperger's Syndrome and cognitive behaviour therapy:New applications for educational psychologists.,Educational and Child Psychology, **22**（4）,4-15, 2005

Hale, William W. III et al. ：Psychometric Properties of the Screen for Child Anxiety Related Emotional Disorders（SCARED）in the General Adolescent Population.,Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry,**44**（3）, 283-290, Mar, 2005.

Hammerness, Paul et al. ：Reexamining the Familial Association Between Asthma and ADHD in Girls., Journal of Attention Disorders , **8**（3）, 136-143 , Feb , 2005.

Hayes, Richard L.; Kameguchi, Kenji ：Expanding Opportunities for Family Counselors in Japan., Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families ,**13**（3）, 291-299, Jul, 2005.

Herschell, Amy D.; McNeil, Cheryl B. ：Parent-Child Interaction Therapy for Children Experiencing Externalizing Behavior Problems.,Reddy, Linda A.et al.（Ed）,Empirically based play interventions for children,169-190 , xviii , 310 , 2005.

Hubbard, Lea ：The role of gender in academic achievement.,International Journal of Qualitative Studies in Education,**18**（5）, 605-623, Sep-Oct , 2005.

Hudson, Jennifer L. ：Mechanisms of Change in Cognitive Behavioral Therapy for Anxious Youth.,Clinical Psychology: Science & Practice, **12**（2）, 161-165 , Sum , 2005

Ingles, Candido J. et al. ：Interpersonal Difficulties in Adolescence: A New Self-Report Measure.,

European Journal of Psychological Assessment , **21**（1）, 11-22 , 2005.

Jackson, Melissa F.et al. ：Innovative Analyses and Interventions in the Treatment of Selective Mutism., Clinical Case Studies, **4**（1）, 81-112, Jan, 2005.

Jeynes, William H. ：A Meta-Analysis of the Relation of Parental Involvement to Urban Elementary School Student Academic Achievement.,Urban Education , **40**（3）, 237-269, May, 2005.

Johnson, Helena S.et al. ：A comparison between socially anxious and depressive symptomatology in youth: A focus on perceived family environment.,Journal of Anxiety Disorders, **19**（4）, 423-442 , 2005.

Karcher, Michael J. ：The Effects of Developmental Mentoring and High School Mentors' Attendance on Their Younger Mentees' Self-Esteem, Social Skills, and Connectedness., Psychology in the Schools,**42**（1）, 65-77 , Jan , 2005.

Kamphaus, Randy W. et al. ：Clinical assessment of child and adolescent personality and behavior（2nd ed.）.,x , 486, 2005.

Katsiyannis, Antonis et al. ：Transition Supports to Students with Mental Retardation: An Examination of Data from the National Longitudinal Transition Study 2.,Education and Training in Developmental Disabilities, **40**（2）, 109-116 , Jun , 2005

Kearney, Christopher A. ：Social anxiety and social phobia in youth: Characteristics, assessment, and psychological treatment.,Series: Series in anxiety and related disorders.,x,220, 2005

Kee, Tony Tam Shui ：A cultural interpretation of locus of control, family and school experiences, and school truancy--The case of Hong Kong.,International Journal of Adolescence and Youth , **12**（4）, 325-349 , 2005.

Kendall, Philip C.et al. ：Cognitive-Behavioral Treatment for Childhood Anxiety Disorders., Hibbs, Euthymia D.et al.（Ed）, Psychosocial treatments for child and adolescent disorders: Empirically based strategies for clinical practice（2nd ed.）.,47-73 , xv , 839 , 2005

Kennard, Betsy D.et al. ：Implementation Challenges to TADS Cognitive-Behavioral Therapy., Cognitive and Behavioral Practice, **12**（2）, 230-239, Spr, 2005.

King, Neville J.et al.,Cognitive-behavioral treatments for anxiety and phobic disorders in children and adolescents: A review.,Behavioral Disorders,**30**（3）, 241-257, May , 2005.

Klin, Ami et al. ：Three Diagnostic Approaches to Asperger Syndrome:Implications for Research . Journal of Autism & Developmental Disorders, **35**（2）,221-234, Apr, 2005.

Knight, Wanda B. ：Charter Schools: Reconnecting Youth at Risk Through Technology-based Instruction.,Visual Arts Research , **31**（1,issue60）, 103-116 , 2005.

Kogan, Steven M.et al. ：The Influence of High School Dropout on Substance Use Among African American Youth., Journal of Ethnicity in Substance Abuse, **4**（1）, 35-51 , 2005.

Kubiszyn, Tom et al. : Pediatric Psychopharmacology for Prepubertal Internalizing Disorders., School Psychology Quarterly, **20**(2), 135-154, Sum, 2005.

La Greca, Annette M.et al. : Adolescent Peer Relations, Friendships, and Romantic Relationships: Do They Predict Social Anxiety and Depression? ,Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, **34**(1), 49-61, Feb, 2005.

Levitt, Jill T.; Karekla, Maria : Integrating Acceptance and Mindfulness with Cognitive Behavioral Treatment for Panic Disorder.,Orsillo, Susan M.et al.(Ed),Acceptance and mindfulness-based approaches to anxiety:Conceptualization and treatment.,165-188, xvii,375, 2005.

Lichtenstein, Marsha : The Importance of Classroom Environments in the Assessment of Learning Community Outcomes.,Journal of College Student Development,**46**(4),341-356, Jul-Aug, 2005.

Marchesi, Carlo et al. : The effect of pharmacotherapy on personality disorders in panic disorder: A one year naturalistic study.,Journal of Affective Disorders, **89**(1-3), 189-194 , Dec , 2005.

Martin, Harriet; Carroll, David : An Evaluation of the Use of the Behaviour Questionnaire., Educational Psychology in Practice, **21**(3), 175-196, Sep , 2005.

Masia-Warner, Carrie et al. : School-based intervention for adolescents with social anxiety disorder: Results of a controlled study.,Journal of Abnormal Child Psychology,**33**(6), 707-722, Dec , 2005.

McCune, Noel; Hynes, Joanne : Ten year follow-up of children with school refusal., Irish Journal of Psychological Medicine ,**22**(2), 56-58, Jun , 2005.

McGee, Gail G.; Morrier, Michael J. : Preparation of Autism Specialists.,Volkmar,Fred R.et al. (Ed).,Handbook of autism and pervasive developmental disorders, **2**:Assessment, interventions, and policy (3rd ed.).,1123-1160 , xxv , 1317 , 2005.

Mitchell, Natasha : Academic Achievement Among Caribbean Immigrant Adolescents: The Impact of Generational Status on Academic Self-Concept., Professional School Counseling, **8**(3) , 209-218 , Feb , 2005.

Moschini, Lisa B. : Drawing the line: Art therapy with the difficult client.,xix , 346 , 2005.

Muratori, Filippo; Picchi, Lara : Psychotherapy for Anxiety Disorders in Children.,Anxiety disorder research.,Velotis, Calvin M. (Ed),233-262 , ix , 316 , 2005

Nix, Robert L.et al. : Decoupling the Relation Between Risk Factors for Conduct Problems and the Receipt of Intervention Services: Participation Across Multiple Components of a Prevention Program.,American Journal of Community Psychology, **36**(3-4) , 307-325 , Dec , 2005

Norton, Peter J. et al. : Hierarchical Model of Vulnerabilities for Anxiety: Replication and Extension with a Clinical Sample.,Cognitive Behaviour Therapy, **34**(1), 50-63 , Mar , 2005.

Oland, Alyssa A.;Shaw, Daniel S. : Pure versus co-occurring externalizing and internalizing

symptoms in children: The potential role of socio-developmental milestones.,Clinical Child and Family Psychology Review, **8**（4）, 247-270, Dec, 2005.

Olatunji, Anane N. ：Dropping Out of High School among Mexican-Origin Youths: Is Early Work Experience a Factor?,Harvard Educational Review , **75**（3）, 286-305 , Fal , 2005.

Ollendick, Thomas H.et al.：Internalizing Disorders of Childhood and Adolescence.,Maddux, James E.et al.（Ed）, Psychopathology: Foundations for a contemporary understanding.,353-376, xii , 468 , 2005.

Ostberg, Monica et al.：Can A Child-Problem Focused Intervention Reduce Mothers' Stress?, Parenting: Science & Practice, **5**（2）, 153-174 , Apr-Jun , 2005.

Pakenham, Kenneth I.et al.：Adjustment in mothers of children with Asperger syndrome: An application of the double ABCX model of family adjustment.,Autism,**9**（2）,191-212,May, 2005.

Panichelli-Mindel, Susan M.et al.：Disclosure of distress among anxiety-disordered youth: Differences in treatment outcome.,Journal of Anxiety Disorders, **19**（4）, 403-422, 2005.

Pini, Stefano et al.：Clinical correlates and significance of separation anxiety in patients with bipolar disorder., Bipolar Disorders , **7**（4）, 370-376 , Aug , 2005.

Rapee, Ronald M. et al.：Prevention and Early Intervention of Anxiety Disorders in Inhibited Preschool Children., Journal of Consulting and Clinical Psychology,**73**（3）,488-497, Jun, 2005.

Richards, Josephine et al.：Children and adolescents with chronic fatigue syndrome in non-specialist settings: Beliefs, functional impairment and psychiatric disturbance.,European Child & Adolescent Psychiatry, **14**（6）, 310-318 , Sep , 2005.

Roth, Anthony; Fonagy, Peter ：What works for whom: A critical review of psychotherapy research, 2nd ed., vii, 661, 2005.

Rumberger, Russell W.et al.：Test Scores, Dropout Rates, and Transfer Rates as Alternative Indicators of High School Performance.,American Educational Research Journal , **42**（1）, 3-42, Spr , 2005.

Sanchez, Bernadette et al.：The role of sense of school belonging and gender in the academic adjustment of Latino adolescents., Journal of Youth and Adolescence, **34**（6）,619-628,Dec, 2005.

佐藤正道 1992a 『世界の不登校研究の展望－1980 年以降の ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の　文献を中心に』,鳴門教育大学修士論文,p.295

佐藤正道 1992b 『1991 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第２号,91-110

佐藤正道 1993 『1992 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第３号,179-197

佐藤正道 1994 『1993 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL

ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **4** 号,174-187
佐藤正道 1995 『1994 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **5** 号,156-167
佐藤正道 1996 『1995 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **6** 号,154-168
佐藤正道 1997 『1996 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **7** 号,89-104
佐藤正道 1998 『1997 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **8** 号,181-203
佐藤正道 1999 『1998 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **9** 号,100-121
佐藤正道 2000 『1999 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **10** 号,86-109
佐藤正道 2001 『2000 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **11** 号,94-122
佐藤正道 2002 『2001 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **12** 号,60-85
佐藤正道 2003 『2002 年の世界の不登校研究の概観ー ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **13** 号,142-170
佐藤正道 2004 『2003 年の世界の不登校研究の概観ー PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **14** 号,74-109
佐藤正道 2005 『2004 年の世界の不登校研究の概観ー PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献からー』,鳴門生徒指導研究 第 **15** 号,53-101
Saxe, Glenn N.et al：Comprehensive Care for Traumatized Children., Psychiatric Annals ,**35**（5）, 443-448 , May , 2005.
Scott, Roxanne W.et al.：An Overview of Controlled Studies of Anxiety Disorders Treatment in Children and Adolescents.,Journal of the National Medical Association,97（1）,13-24, Jan, 2005.
Shechtman, Zipora; Pastor, Ronit：Cognitive-Behavioral and Humanistic Group Treatment for Children With Learning Disabilities: A Comparison of Outcomes and Process., Journal of Counseling Psychology, **52**（3）, 322-336, Jul, 2005.
Silverman, Wendy K.et al.：Progress in Developing an Exposure-Based Transfer-of-Control Approach to Treating Internalizing Disorders in Youth., Hibbs, Euthymia D.et al.（Ed）, Psychosocial treatments for child and adolescent disorders: Empirically based strategies for clinical practice（2nd ed.）., 97-119, xv, 839, 2005.
Silverman, Wendy K.;Ollendick, Thomas H.：Evidence-Based Assessment of Anxiety and Its

Disorders in Children and Adolescents.,Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, **34**（3）, 380-411, Sep, 2005.

Sinclair, Mary F.et al.：Promoting School Completion of Urban Secondary Youth With Emotional or Behavioral Disabilities.,Exceptional Children, **71**（4）, 465-482 , Sum , 2005.

Siqueland, Lynne et al.：Cognitive behavioral and attachment based family therapy for anxious adolescents: Phase I and II studies., Journal of Anxiety Disorders, **19**（4）, 361-381 , 2005.

Sirin, Selcuk R.：Socioeconomic status and academic achievement: A meta-analytic review of research., Review of Educational Research , **75**（3）, 417-453 , Fal , 2005.

Sirin, Selcuk R.; Rogers-Sirin, Lauren：Components of School Engagement Among African American Adolescents.,Applied Developmental Science, **9**（1）, 5-13, Jan , 2005.

Siu, Andrew M. H. et al.：The Chinese Version of the Social Problem-Solving Inventory: Some Initial Results on Reliability and Validity.,Journal of Clinical Psychology, **61**（3）,347-360, Mar, 2005.

Spera, Christopher：A Review of the Relationship Among Parenting Practices, Parenting Styles, and Adolescent School Achievement.,Educational Psychology Review, **7**（2）,125-146,Jun, 2005.

Stone, Susan I.et al.：Getting It the Second Time Around: Student Classroom Experience in Chicago's Summer Bridge Program.,Teachers College Record, **107**（5）, 935-957, May, 2005.

Suh, Suhyun; Satcher, Jamie：Understanding At-Risk Korean American Youth .,Professional School Counseling, **8**（5）, 428-435, Jun, 2005.

Suveg, Cynthia et al.,Separation Anxiety Disorder, Panic Disorder, and School Refusal., Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America,**14**（4）, 773-795, Oct, 2005.

Taylor, Ronald D.; Lopez, Elizabeth I.：Family management practice, school achievement, and problem behavior in African American adolescents: Mediating processes.,Journal of Applied Developmental Psychology, **26**（1）, 39-49, Jan-Feb, 2005.

Treatment for Adolescents With Depression Study（TADS）Team：The Treatment for Adolescents With Depression Study（TADS）: Demographic and Clinical Characteristics., Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry, **44**（1）, 28-40, Jan , 2005.

Tyrrell, Maureen：School Phobia.,Journal of School Nursing, **21**（3）, 147-151, Jun , 2005.

Valdez, Carmen R.et al：Evidence-Based Parent Training and Family Interventions for School Behavior Change.,School Psychology Quarterly, **20**（4）, 403-433 , Win , 2005.

Vander Stoep, Ann et al.：Universal emotional health screening at the middle school transition., Journal of Emotional and Behavioral Disorders , **13**（4）, 213-223 , Win , 2005

Vecchio, Jennifer L.; Kearney, Christopher A.：Selective Mutism in Children: Comparison to Youths With and Without Anxiety Disorders., Journal of Psychopathology & Behavioral Assessment, **27**（1）, 31-37 , Mar , 2005.

Walker, Sheila O. et al. ：A Genetically Sensitive Investigation of the Effects of the School Environment and Socio-Economic Status on Academic Achievement in Seven-Year-Olds., Educational Psychology, **25**（1）, 55-73 , Feb , 2005

Wang, Xia et al. ：Comparison of the Educational Deficiencies of Delinquent and Nondelinquent Students., Evaluation Review , **29**（4）, 291-312 , Aug , 2005.

Warren, John Robert ; Jenkins, Krista N. ：High School Exit Examinations and High School Dropout in Texas and Florida, 1971-2000.,Sociology of Education ,**78**（2）,122-143, Apr,2005.

Weems, Carl F.; Stickle, Timothy R. ：Anxiety Disorders in Childhood: Casting a Nomological Net.,Clinical Child & Family Psychology Review, **8**（2）, 107-134 , Jun , 2005.

Weiskop, Sophien et al. ：Behavioural Treatment to Reduce Sleep Problems in Children with Autism or Fragile X Syndrome.,Developmental Medicine & Child Neurology, **47**（2）,94-104, Feb , 2005.

Wiederhold, Brenda K.; Wiederhold, Mark D. ：Virtual reality therapy for anxiety disorders: Advances in evaluation and treatment.,Virtual Reality Medical Center, CA, US; Virtual Reality Medical Center, CA, US,viii, 225, 2005.

Wigfield, Allan et al. ：Early adolescents' development across the middle school years: Implications for school counselors.,Professional School Counseling, **9**（2）, 112-119, Dec, 2005.

Wong, Siu Kwong：The Effects of Adolescent Activities on Delinquency: A Differential Involvement Approach.,Journal of Youth and Adolescence, **34**（4）, 321-333 , Aug , 2005

Yorgason, Jeremy B. et al. ：In-Home Family Therapy: Indicators of Success.,Journal of Marital & Family Therapy ,**31**（4）, 301-312 , Oct , 2005.

Zhang, Dalun; Ivester, Joy; Katsiyannis, Antonis ：Teachers' view of transition services: Results from a statewide survey in South Carolina.,Education and Training in Developmental Disabilities, **40**（4）, 360-367 , Dec , 2005

＜英文タイトル＞

A Review of the Studies about Non-Attendance at School,School Phobia,and School Refusal in the World（2005）　:SATO,Masamichi